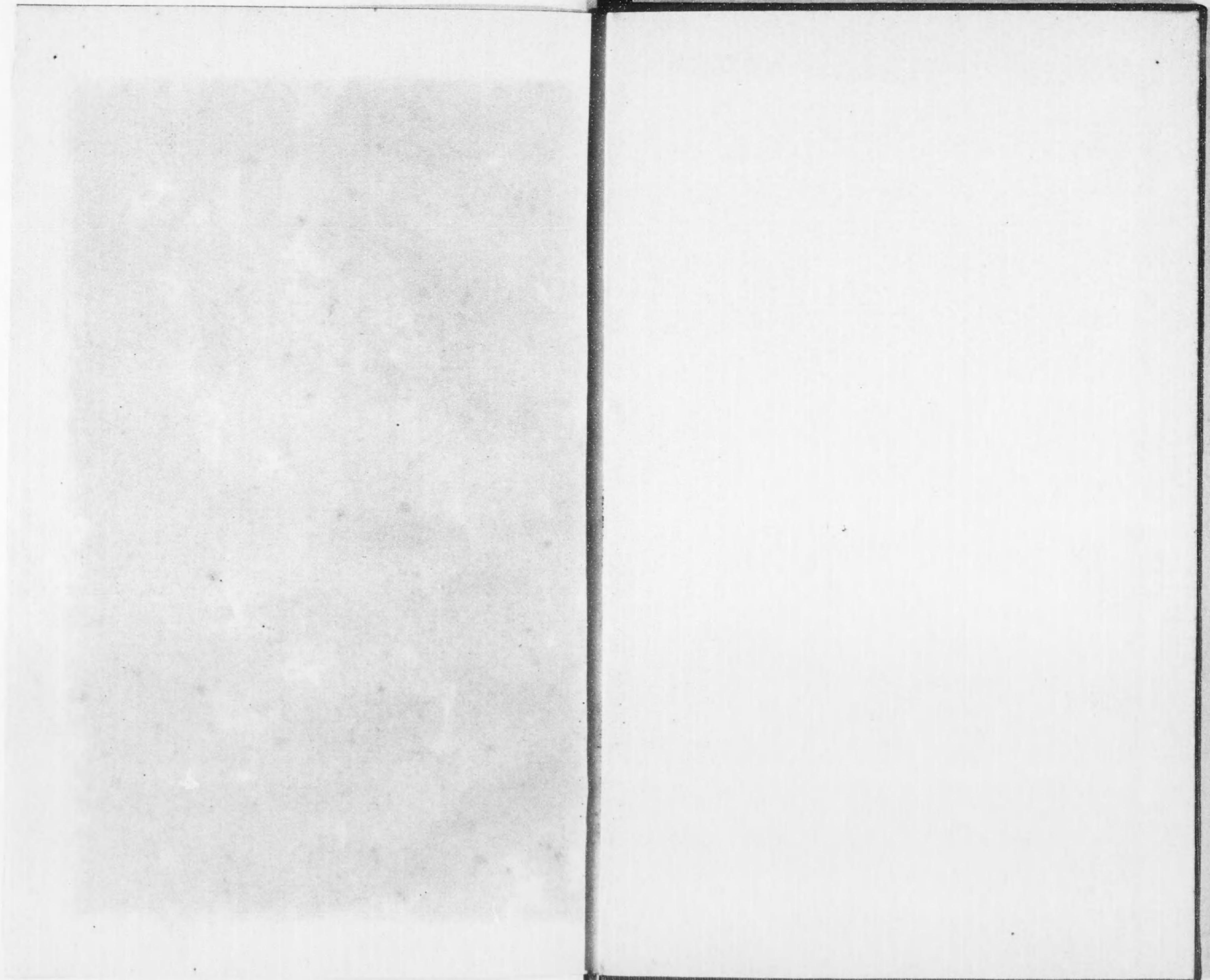


始





特



特108
537

神感著者九鬼盛隆



小神示
宇宙の統一

全



東京本道宣布會藏版

宇宙の統一

緒言

本書は、次に示せる、編成の経歴に述べし如く、當初、不肖思ふ所ありて、特に神に御願申上る所があつた、然るに、畏くも大神等は直裁に御嘉容を賜はり、雅事文藝の主宰神、明妙言幸比女命を、總裁に任命され、冥界に在る皇國人の最も適材なる文士の靈、及び外國人の各其道に精通せる學者の靈等、合せて三十四名を選抜し給ひ、神界に於て、特に本書の編纂會の如きものを組織せられ、其意見を纏めて、近世魂上りせし皇國の文士某の靈が、不肖に直接口述する任務に選まれ、去る八月一日より、九月二十一日に亘り、神憑り神筵を重ねること、前後六十回、晝夜講演を受け、之を筆録編纂し、始めて完成したものである。

扱、未だ本會の成立を知らず、又、吾等の事業を解せざる讀者は、劈頭第一に、此著作が、餘りに現境と遠かる、破天荒の事情なるに驚異し、讀者各々様々に、感想を

驚せらるることであらう、是は素より覺悟の上であるが、但だ、最も迷惑に感ずるは、本書の内容が、各種の専門學業に涉りて、餘りに取材の豊富、且識見の卓越せるを見て、不肖一人の手にて成れるものとは、誰人も信せざることならんも、或は他の専門の人々の智識を藉り、之を纂録し、而も神示に假托して、世の好奇心を唆り、道の宣傳に資せんとするものであらうと、誤解さるゝことである、若し斯ることになれば、本書公表の意義を没却するのみならず、神々に對し奉りて、寔に恐多い次第である。

此點は、惟り不肖の憂ひのみでなく、大神等も甚く軫憂遊ばされ、乃ち此誤解を防ぐべく、豫め種々の手段を示されてある、故に不肖は此靈告を受ける神筵を開放的に、誰人にも陪聽を許し、此實況を知らしめ置いた、其列席者は數十人に及んでゐる、中には知名の士もある、若し研究上疑ひを挿む人あらば、何時でも實證を示すは厭ふ所でない、殊に吾等は、常に直接に神に咫尺奉仕する身である、故に、神を敬ひ神を畏るゝことは、何人にも譲らない積りである、何麼して世を欺くことなどが出來やう

ぞ、是れ迄も、亦今後も、斷じて已れを欺かざるを、確き信條として居る、況んや他に對するをやだ。

乃で、此書は全く、神靈の告示に依り成れるものであることを、今、卷頭第一に誓言して置く。

然れども、斯る奇現象は、内外古今、文獻あつて以來未聞のことに屬し、近く神靈の實在を慥むべき機運が迫つてゐても、まだ世間一般が、科學に酔ふてゐる今日、稍く内外少數の思索家が、未知の世界の研究に、一步を踏み入れかけ、神秘の蕾が、將に綻びんとする、大切の時であり、恰も本書の内容が、實に驚倒すべき問題であるから、豫期以上に、内外識者の注意を喚起し、或は神秘研究の前驅となり、一度は世を騒がすに至るかも知れぬ、否、日後必ず天下を懾服せしむる機會があるであらう、果して左様なことになれば、本書は別に絶大なる目的があつて、神示を賜はつたものではあるが、或はこれが、神靈指南車の發軔となつて、意外の副産物を、世間に貢獻す

ることになるかも知れぬ。

して見れば、不肖が本書を公にするは、非常な意義と、責任を有することを覺悟せねばならぬ。

故に、事の経歴を詳記して置く必要がある、好し煩瑣として讀まない人等は別として、之を研究の資料にせんとする特志者、又興味を有する讀者の誤解を釋かしめんが爲めに、畏れれども、本書編成に關し、前後凡ての、大神の神詔までも、遺さず経歴の事實を、羅列することにした。

終りに一言斷つて置く、是の如き事情の下に此書は成つたもので、固より神示小説である、小説に違ひないが、世間普通の、徒らに讀者の感興を主とし、利功を收めんとする、目的でないことは勿論である、然らば、咸く神の豫言であるかと糺されたならば、不肖は茲で明言することは出来ぬ、何となれば、神の絶大なる經綸は、徒らに吾等の村度を許さぬからである、讀者は宜しく、此意味を了解して精讀されたい。

更に一言を添へる、此書の編輯執筆は、全く不肖一人の手に成つたものであるから、斯る文業に不馴れな不肖としては、精一杯に力を竭した積りでも、必ず不備の點が多からう、又稀には言靈の誤聽があるかも知れぬ、此責は一切編者不肖の負ふ所である。

大正十三年秋季皇靈祭の日、本道宣布會道場撰修房に於て

九 鬼 盛 隆 謹 誌

叙言

神選文士の靈、告示

(八月一日夜)

此方は、近く人世に實在せし身であるから、徒らに在世の身分を明かにすることは叶はないが、そなたの今回の破天荒なる計畫に就き、此方が最も適せる廉を以て、殊更なる神の嚴命により、此方が現幽兩界に涉りて、未だ曾て經驗せざる、斯る席に現はれた次第である。

今回幽冥界を通じて、未だ曾て無き所の、喩ふことの出来ない、集會が、内外の我徒を主宰し給ふ、神の御許に開かれたのである、故に各自が、具ふる所の靈智を、何れも開陳した次第であるが、之を統轄し給ふ神は、嚴肅なる神筵にあらねば、徒らに人言を藉ることの叶はぬ神格である、此方はそれが爲め、破格の光榮を以て、是より席を重ね、そなた等が窺知せざる、未聞の別世界に現はれある事象を、悉く現在の

世界に引寄せて、説き明す次第である、此旨を以て、是より逐次筆を採つて貫ひたい。

各自の意見の一致せし點は、此文章創作の主眼は、實在の生活を、其儘描寫して以て、實生活を營める個人の心鏡に、實生活の複寫感興を與ふるものが、文藝の本體にあらずして、人類の心鏡に描く所の文藝なるものは、實生活の彼方にある未知の世界、即ち理想郷の實現にあらねばならぬと云ふことが、今地上の世界に臆氣ながら、感じられて來た。

今や人類世界の傾向は、即ち文藝の神秘化する潮流が、急速度を以て漲りつゝあるのだ、現在の世界に於て、文筆を以て、諸人を動かさんと欲するものは、此眞理の將に開かんとすることを、第一に覺悟せねばならぬ、是を以て、今回の編纂も、最初に於て神秘的叙事を以てし、尋いて現在の實體に移り、而して再び神秘に歸結しなければならぬ、是れが彼等一同の同一見解であつた、是れは此方も等しく懷抱する所の新

事實である、然るにそれは、我等の既に人界を去つた者、及びそなた等の如く、道の神秘境に生息するものは、一般愚劣なる人間共が、未だ斯る向上の進歩に入りあらぬと云ふことを、考へ及ばぬ缺陷である。

現幽兩界に亘りて、自在の能力を具ふる所の神は、之れを能く知る、故に此編纂が、現在蒙昧の人類を啓導し、未だ斯る愚劣なる人間共に、神秘を味はしむるが目的であるから、先づ以て彼等をして、知悉することを易からしむるが、肝要であること云ふことが、神意により、緊切なる實在世界の、現在の實相より發足して、事相の展開に本き、漸次に神秘の世界に導き入るゝと云ふ、趣向が成立されたのである。

それをそなたも本旨と爲し、執筆せねばならぬ、今此方の述べたる所は、本文の緒論にあらずして、卷頭第一に掲ぐべき、叙言、簡單に要旨を言はゞ、そなたが本文を編み成す、そが趣向に對する宣言である、雄叫びである、此方が今述べ來りたる所を、骨子と爲して、之れにそなたが得意とする所の華麗の文飾を施し序文とせられよ。

今述べ來りし所の主旨は、現在人類世界に於ける、文藝思潮の、革新を來すべき所の、革命戦の第一弾である。

扱此著作の題名じや、題名を宇宙の統一と爲し、神感著者としてそなたの姓名を現はすことにせられよ。

次の席より本文にかゝり、説述を省略して、そなたが編纂に便ならしめんが爲め、章句體を以て口演する。

四

本書編成の経歴

大正十三年七月二十九日神庭に於て、奇御魂神の主宰神、言紡平戸命を迎

へ左の言上を爲し、神慮を伺ひ奉りし文案。

大正九年の秋、盛隆等不肖の身を以て、畏くも、大御神より、本道宣布の業に従ふべく、神詔を拜して以來、爰に五星想、其間一身一家を顧みず、幾んど世交を絶ち、先づ其根基を固むるに、孜々營々心身を傾倒し、神命に副ひまつるべく、勤み來りしことは、既に御照覽あらせらるゝこと、信じ奉る、尤も道を宣り布く方法に就きまじは、事毎に大神等の御教を賜つて居りまするが、現世には申上げ難き厭煩の事情がありました、却々神々等の思召給ふ如く、諸事思ふ如く運び兼ねます、それと申すは、盛隆の資性魯鈍にして事を謀るの拙きに因るは勿論でありまするが、現世にありては何事にも、第一に資金なくしては、一步も進めることが叶ひませぬ。

次に要するは同志人才であります、然るに、此二大要素共に、絶無と申して宜敷
 までに缺乏して居ります、尤も神々より、古來類例もなき奇靈なる、數多の秘法も
 授けられてあります故、例へば運命を豫知するとか、難病を靈治する業などを、價
 に換ふる道を取りますれば、多少の宣道資を得られぬことありませぬ、誰人も皆何
 故に廣く此途を取らぬかと勸められますが、偏狹なる私の考にては、斯る尊き大な
 る道を主唱するに、此珍なる秘め業を賣物にして、世間の穢らはしき、物寄せ共の眞
 似が何麼して出來ませう、若し便方として之を實行せば、一の惡き履歷を遺し、本つ
 道の根柢を傷くことになることを深く憂ひ、敢て之を致しませぬのみか、誤解さるゝ
 ことを懼れまして、親戚や知己などに對してすら、斷じて寄附援助等を頼みませぬ、
 これが今に至るも遅々進展せざる理由であります、次に意志堅固なる同志を得ること
 であります、是れも今日まで、未だ眞に頼るべき人を得られませぬ、故に只片腕
 と頼むは、此神傳人と、漸く會を支持する、經濟の大部分を負ふてくれまする一人の

特志と他に二三の援助者があるのみで、其他事務萬端を處理するに、私の一族の者數
 名を献身的に従事せしめて、經費の節制を計つて居る次第であります、願ひますれ
 ば、昨年二月神命により、愈々起つて新たに道場を設け、本道宣布の旗幟を樹て、尋
 いて六月に本道なる冊子に、會の趣旨、經歷、事業及び重なる神詔を掲げ、之を一萬
 部程、世間の知名の人々をして醒覺せしむべく、配本しましたが、曩きに大本教なる
 邪教の前轍がありました、神憑とか、鎮魂とか彼れが申しましたるに類せること、恐
 れて近かぬものや、又驚異の眼を注ぎつゝ、窃かに其進展の様を窺ひつゝある向も、
 多少あることが判つて居りまするが、進んで近きませぬ。

其後、かの昨秋大震火災の來ることを、六月十三日に神示を蒙り、此豫告の實現せ
 しを好機として、苦心慘憺漸く十一月に、創めて本道と題せる月刊雜誌を創刊、神示
 に従ひ、六萬部を全國各團體、其他要所々々へ配達し、以來毎號、大神等の神詔を経
 とし、之に解釋を加へ、極力敬神尊皇の道を宣べ、或は皇國の危機、時局に關する教

訓警告等を、雄叫びして居りまするが、兎角利功一片に傾ける俗耳には、此大言も響きませぬ、殊に科學の外には眞理なしとして、耳を掩へる現世の小賢者共は、神と云ふ字を冠せば悉く之を迷妄と做し、神憑など、申せば、讒謗を極めて一蹴し去ると云ふ有様で、國家の危殆に迫れる事、或は大神の豫示し賜ふ如くに、内外の事變が實現して参りましたすら、猶且つ恐れず、殆んど吾等に近づくを、危険なる者の如く心得る様な、歎かはしき現世の狀態でありまする。

是に到りて、殆んど宣傳の方策に窮して参りました、私は固より倒れて後止む覺悟でありますが、顧みて隸屬の者共の、疲憊せる様も見せず、孜孜として黙從勤勉して居る狀を眺めまして、皆私の計圖が過つて居た爲めなるを覺り、且つ是れ皆神の盛隆をして百鍊千磨、以て大業を達成する、根基を固めしめんと爲し給ふ、大試鍊なることを覺悟致しました。

以來日夜思を焦し、想を練り考察せし後、始めて從來の宣傳の方法が、餘りに高き

に過ぎ、普通一般の理解し難き爲め、近づかざりしことが、明かに直靈に浮びました、乃で今後は其方針を一變し、衆人の好む所に順ひ、卑近なる所より誘導する方策を取らばやと、考定致しまして、先づ手近に現今、世に愛讀せらるゝ小説と申す、鄙振りの書き本、之を以て、從來神詔の大綱を經緯とし、便ち目下日米問題に就き、國民の興奮せる時を機とし、先づ戰禍は神の經綸にして避くべからざる事、即ち、忍ぶべからざる國辱を蒙ること重なる狀、彼米國を膺懲せざるべからざる機の湧起せし狀、實戰の狀、皇國戰敗の慘狀、神の援護を受けざれば皇國は滅亡するの外なき狀、果然、神威顯現して奇靈なる事實突發し、米軍大敗の狀、之に依りて世界列國を懾服せしめ、始めて皇國は、世界萬國の推戴する所となり、地上は、咸く我天皇陛下の治下に統一され、永遠の平和と榮福は、神政によりて確保さる等の狀、是皆豫示を蒙れる事相でありまする故、是等を面白く、且つ嚴しく描寫せる小説本を、世に公にせば、識らす識らず、敬神尊皇の大義は、宇宙の眞理にして、我臣民は即ち神統を承け

たる、世界特種の國民なるを曉らしめ、始めて本道に歸信致すことになるならんことを考定致しました、仍て月餘に亘り構想を練りましたが、盛隆の文筆才能之に伴はず、殊にこれが權威あるものを作らんには、現代の科學を基調とし、天文地理、政治國際、社會經濟、海陸軍事、航空電氣等に至るまで、實に宏汎なる概般的智識を要し、若し此れが著作に従事することせば、少くとも半年位は、材料を備るに費さねば、能はぬことに想ひ到り、懊惱を極めましたる末、昨拂曉豁然として直靈に感じました、此は他ではありませぬ、神命を以て、其道に精通せる在冥の文士等の靈をして、構想を練らしめ趣向を調へしめ、其大綱にても奇御魂迎神蒞に於て、之を盛隆に口授し給はることが叶ひますれば、盛隆は此を現世の文體に編み成し、之を世に公にすることが叶ひ、必ず豫期の如く、功績を擧げ得ること、確信致しました、即ち今贅々しく此の事情を申上る迄もなく、尊神は疾くに御照覽し給ふこと、存じ奉るも、常に何事にまれ細大御教を蒙り、畏れれども、盛隆は尊神を尊き無上の師父と仰ぎ奉れる爲め、斯

くも一切腹藏する所なく、悉く披瀝申上ましたる次第で御座りまする、若し盛隆の今願ひ奉る事共が、御神慮に副ひましたならば、何卒速に御許容を給はらんことを、一向るに祈願し奉ると申上げしに對し。

神は左の如き優渥なる、神諭を賜はつた。



言紡平戸神、神示。(七月二十九日、神蒞)

吾れは言紡平戸、言擧げ問質すること、此を能く辨ふ、是は今より吾れ、神界の神等の神慮を伺ひ、神議り問ひ事爲さむ、斯くて次の神蒞を以て、其次第を具さに傳ふ。吾れ現世の學びの理と、今の世態とに照し合せ、神界の神等に、問ひ質す事の由を今洩らす。

今度そちが、直靈運らせる事共、世情に順らへ、最と賢明き企みなるも、辨へ違ふ

節もある、そは、現體一たび前の世に形成し、斯くて魂上り爲せし文人共の、靈迎へてかくも言依しを受け、著作爲さば、諸人は、彼れ現世に在りし稱名に惑ひ爲し、而も此奇し業を、外國にも類ひある、今の靈媒交靈と辨へ違ひ、事理輕げとなる。

此は、彌事知大神の神屬、雅事文藝司る、其が主宰神を、奇魂迎へ爲す神筵に招ぎ、斯くて其告事を承け、そを編み成し、之を其文、今の文體に擬らへ装ひ爲せ、かゝれど、之を司る主宰神も、現世に顯はとなす、斯る著れ事は容易からぬ、此は其方、考へ浮ぶが如、内外の魂上り爲せし、企み卓越けき文人等、之を集會はしめ、各自得敏き練達の手腕揮はせ、其が口述る綾を集め寄せ、其方編み成して綴れ、此を言依す、此理を能く辨へよ。



言紡平戸神、神示。(八月十三日朝、神筵)

今度の大企事。之を吾れ大神に由言遂げ、大神系の雅事文藝の主宰神、明妙言幸比女命、之を總裁と爲し、内外俊秀、顯者の手筋を會はしめ、神議りを重ねたる、此の女神は、彌事知大神の神系なるも、最と聰明き神、こは隱身の神、獨身の神、内外國の風雅文藝に携はる輩、等しく神徳を文くべき重き神、そち共も、諸人も將來は、厚く齋き祭らねばならぬ光り顯明き力廣き神、故に事擧げ成らば、此神の下使者、今の内外の世態人情に事長けし、明敏き文學者以て、具體的に言依し爲すを、其方一渡り装ひ凝らさば、直接に公けと爲すこと叶ふ程の、事遂げ叶ふ。

文雅の道も、今は墮落み、下卑事蔓り、諸人の文雅心も衰へ、陋劣き文様となりある、斯れば先づ範を示し、此も亦匡正す事、其方共の任務なれど、今は世情に順らへ、諸人をして直裁に、信服爲さしむること肝要め、斯れば諸人に、支へなく筋目の通る言綾を以て口演あらまほし、祈請事爲せ。

毎夜静けき時を計り、怠り無く神筵を開け、席を重ねる事、五十回程にて事成る。

我今憚りて大綱は示さぬ、翌月の初日より神遊を正せ、今夜は初の齋き仕へ爲せ、此は神遊毎に甚と長し、其心して準備にかゝれ。

編書爾神力乎添邊賜波夏武事乎明妙言幸比女命乃御前爾祈願白須詞

此乃神殿爾雅事文藝乃主宰神明妙言幸比女命乃神靈乎招奉利今日乃生日乃足日乎吉辰止齋定神事爾仕奉留九鬼盛隆敬比畏美氏心計乃禮代止志氏献御饌御酒種々乃供物乎平介安介久所聞食止稱辭竟奉留

掛麻久母畏介禮度毛今請願白須事乃由乎直具爾聽分給閉止一向爾祈奉留往年盛隆拙劣支身乎以氏大神命畏美承奉利氏與利惟神本道宣布久業爾事邊日爾夜勤務美奉禮毛今乃世人乃心情風習日日爾荒美亂禮行支殊爾毛雅事文藝波咸久

外國乃卑幾汚夏波志幾態乎歡比習比氏吾傳邊留嚴志幾尊幾大神等乃神詔教事或波正志支古道乎婆解釋支說明支氏文章爾編美成志國中遠近爾撒支配禮度毛眞爾其功績舉良奴乎盛隆一途爾懊惱美志末近頃直靈爾浮比志波先津輕與利重爾卑與利高爾漸次爾誘比導久手段止志氏大神等與利神詔乎賜波禮留大經綸乃一節留我皇國波彼東乃夷國與利忍比難支國辱乎受介志事積嵩美正義乃爲米近久太矛拔放知氏彼兇暴者乎膺懲左武止大戰爲須爾至留事趣次爾皇國乃有司等神命爾遵比奉良坐利志爲米軍敗禮氏古與利例毛奈支彼醜夷爾國威蹂躪良禮半婆國亡留爾到利最早人力以氏支布留事叶波奴甚慄呂志支慘狀乃事共乎描寫志此爾始米氏奇志支恐留可支大神威現波禮斯久氏彼東乃夷國大災禍湧出氏終爾皇國乃大捷戰登成利戰局終焉乎告警内外乃黑雲神風以氏吹拂波禮大八洲萬乃國々波皇國乃

異奈禮留尊支國體乎望見氏彼等與利自良進美氏我統治武留下爾從比奉良武止請到
茲爾始米氏我天皇波世界乎統治須神政乎四方爾布支地上乃蒼生波長邊爾平介久
和良岐彌神德乎仰岐神惟本道乎敬比信自神教爾赤誠乎捧奉爾到留其賀大
綱乎今乃世乃小說止奈武稱布留鄙振乃文體以氏事編美成志是乎古曾世爾廣久打擴
米奈婆上下都鄙乎問波傳世人歡比讀美氏識良受識良受正道爾誘比道久此上無支便
方止成良米止思定米侍利志毛固與利盛隆賀拙支筆以氏此大事乎成遂具留事乃難支乎
覺利志儘是賀神力乎添邊賜良武波事乎言紡平戶命爾事諮申志只管願奉利志爾辱
奈久母大神等波此願事乎嘉容禮左世給比志御旨乎具爾承利盛隆此上無久喜比乃
餘利勇美奮起知氏勤美斯久母尊支渥支大神惠爾酬奉良武事乎畏美氏誓比奉留猶今
與利後毛吾徒賀風雅文事爾係留諸業乎教導支給波武事乎恐美恐美毛祈禱奉留



明妙言幸比女命 神詔 (八月五日夜神筵)

彌言知大神の神系、言幸乃女、吾れ斯る奇び事、言依しは、初の神筵、今度其方の道を宣り布くに、最と賢明き、便方企みし爲め、殊更なる大神の命以て、吾れ事主率爲す、吾れ元より、諸人の天地の微妙くも、麗はしき様眺め、稱へ言辭、言靈を綾爲し、心情紙の面に連ね、諸人に傳ふる、文雅の諸業を統べあるも、現世に神手指し、直裁に、斯くも事綾爲すは、例しなきこと、今度の様を示す、遠き近き、内外の身上り爲せし文人共を、今度幽の邊に集はせ、今の現世の表面の状を示し、其方が、計圖の旨を明かし、斯くて、則を越へたる神議、神定め、或は天つ定め、前途の事共を洩らす、議事遂げしもの。

冥には、形象爲す文字無し、胸靈に胸靈を映し、或は言靈を通はすのみ、今度の

計畫も、内外の文人、三十四首程會はしめ、思想を言靈以て、其が大綱を組み成し、章成し、其が編み成せし旨を、現世に最と近き、日本の言詞に長け、定めを、文體の言辭以て、直接に、口傳事計りに巧みなる、人靈を選び、其方が身近に遣はせし者、斯る幽の理を能く辨へ爲せ、計事遂げあれば、次の苑より、現世の趣に擬らへ、諸人の等しく信じ爲す、巧みの文章とならむ、種々の申事、諾ひ置く。



天思包大神、神詔 (八月五日夜九時神筵)

今度、其方が企み勤みある編書、此は吾れ殊更に稱へ爲す、此は諸方面の支へを却け、一向るに事遂げ爲せ、種々の怠り嵩みあるも、今度の記事遂げなば、大神も嘉さるゝ、能く辨へよ。

此を以て本道を、今の敏捷き者共に、眼注がしむる、現世の巧の手段を示す。

事編み半ばに至らぬ前、此企み事、密かの如装ひて、而も種々の手段を運らし、諸方面の機縁人に知らしめよ、文綴る輩、學びの徒、新誌に勤む徒、此をこそ珍らかなる、奇き事と爲し、會ひ寄り、虚事ならぬ眞實の様と見て、者共一時に之を世に公けと爲し、其方共の稱へ名、一時に諸方面に打ち廣ごり、手段運らす好き機縁となる、此現世の理を能く辨へ、巧み宜げに便方せ。

殊にも月々編み爲す、次の雜誌に、今度の事公けと爲せ、事遂げ大綱成らば、吾れ再び至り、諸方面の便方爲す種々、手段を示さむ、此は初刷は人手に委ねで、已が手以て營み爲せ。

今度の事共、大内の輩、自ら此方に眼注ぐ機縁の一つ、此を深く辨へよ。



天懸武日穗子大神、神詔 (明治天皇御神名。八月十二日午前三時神筵)

吾れ現世に臨みありし、其が砌、司爲せし彼れ桂と事議り、戊申歲、大誠詔書爲せしが、かれは寔は、事議りせし砌、武人共の處世行狀、日々に頽れ亂れ、華美心募り、驕亢りて、忠勤心の廢れ行く狀を、深く憂ひ、軍人をのみ誠め呉れよと申せしが、更に吾れ能く内外の狀態を見渡すに、是れ世態の勢ひにして、諸人氣緩み、娛樂心募り、事毎に冗費を厭はで、華美のみ好む、其が風習に、軍人共感染りて、斯くこそある、斯れば軍人共をのみ戒しむるは非事と論し、斯くて國民を一括べに、大誠め爲せし者、今は、吾世にありしそが砌にも彌増して、忍び難き狀とはなりぬ、今度の首相、愚ながらも、此の華美なる移り心を抑へむと、種々冗費を正し、律事窮めあるが、此は表面理に似て而も甲斐なし、今は費す物、日々に浮れ行く狀を以て、其が冗費を正すこそ宜からめと、彼奴共事企み爲せしも、是は大非事、功なし、來む前途の様を見よ、此は之を誠むると、自ら革正すと、二途ある、此は民統ぶる業に長けたる、敏捷き彼れ千足(故伊藤公)を以て、謀事具さに洩す、十四日の夜を以て、誠厚き徒を會はせ、

具さに事承け爲し、事謀り告知らす事共、洩さば誌文に記し、其を要め々々の徒に差し付けよ、打見る所、今の狀態調はで、手段なし、なれども、一端を洩し置く、間近に大内に神手掛る、此は其が機縁誠に奇び事、次は其方今、日に夜に勤みある、小説の事編み、之をこそ竟へなば、鈍ましくも、小智深く目捷き者共、一時に集ひ寄り、其方共を荷ひ出すが如、騒ぎ出し、一時に事運び初む、各々務めに勤めよ、暫しの間、此を殊更に誠め置く。



美曾速千足命 神示 (故伊藤博文の靈、八月十四日夜九時)

吾は美曾速千足である、今度は殊更なる大神の詔以て、殊更なる、御神諭を傳へむが爲め、現れ出でしもの、是は幽の彼方の秘事であるから、徒らに洩らしたくはないが、そなたは、斯る事を、聊か辨識して置かなければ、辨へ違ひを來す恐れがあるの

で、已むなく一端を洩らす。

現界を去つても、未だ冥界に到ることの出来ない幽律おきての爲めに、或る中間に、逍遙して居る人靈は、凡て當時の世態人情悉く、其表裏を辨へてゐるが、幽に入つては、容易く例を擧げて示さば、神の眷屬とも申べき、身柄となれば、特別なる神の許を得なければ、現界に出入することは出来ないのである。

乃なで皆如何にして仕へ居るかと言ふと、未だ幽の彼方に住ふことは叶はないが、已に裁き戒め竟つて、幽冥界と現界との間を、自由に翔け廻つて居る所の靈魂がある、神となれば、徒らに現界に到り、或は現界に直接奇蹟を示すといふことは、出来ない幽律があるので、乃で今言ふ所の、兩界に出入爲し居る者より、諸方面の報告を齎らす、其れを綜合して、所謂の眷屬の輩が、之を神に報告する、是に於て、吾等神座に列するとの叶ふ側近の者が、神命を體して協議を遂げ、其議御旨に副ひし處を以て、之を靈界と言はず、現界と言はず、處置執行する次第である、其れ故に、寔は此眷屬

其の齋らす報告は、必ずしも正確を期することが難い、故に御旨を體して、之を現界に施せば、其事實、或は結果に於て、齟齬を來す、是れ寔に由々敷大事である、斯る事象を生ずるに於ては、大神眞に威振らせ給ひ、大なる力を出され、神則を越えて直接現界に手を下されるのである、斯る次第となれば、自然現象の上に於ても、人事に於ても、容易ならざる事が惹起するのである、今度も神則に本いて、其れ々々筋の者を、各方面に遣はして、其れを支配する徒に、種々の衝動を與へたが、其行ふ所、其來せし結果、悉く神旨に副はない、是に於て、大詔を奉じ、吾れ殊更なる告言を洩らす所以である。先づ第一に責むべきは、現在の司直である、此は吾れ事洩し爲すは、厭ふ所であるが、此司直の輩には、傳統的陋習とも申べき、即ち前司直の行ひ残したること、新たに設けたこと、此等の事共、施政の根本方針を覆へすが如き、主要なる點に觸れない小事は、悉く新たに立てる司直が、之を踏襲しなければならぬといふ、不文律がある、眞に君國の爲め、一身を賭して、大命を荷ふたならば、誰人と雖も、斯

る陋習は、一時に打破るべきものである、此は屢次朝に立てる者は、之を辨へて居るから、暫く政權を離れて、時の司直を批評する、境遇に立ち居る際は、吾れ取つて代らば、此れ々々は正す、彼は改む、此れは廢す、斯様々々の點は斷行するから、先づ吾等の手腕を看よと、恁う言を大にして、徒らに辜負するのみでなく、已等も斯く信じて起つのである、然るに、一度司直となれば、此勇猛心は忽ちに萎縮して、殊には、最も此緣由の大を爲すものは、吾等今此點を改め、彼點を正し、斯く々々斷行爲せば、若し一たび政權を離れむか、諸方面より、非常の壓迫を被り、殊に厭ふべきは、復び朝に立つ能はざる身となる、之を憂ひ、之を恐れて、何事をも所期の斷行を得爲さず、殊には内心已等も、甚だ善しからずと思ふ事までも、職責上、表面を糊塗せむが爲め、之を行ふ、是れは司直に係る大弊癥である。

今の司直が亦此通りである、近き施設が威く、命の御旨に反して居る、其爲めに現界に於ける、惰力的情實が、今絡むであるから、吾れ直ちに實現すると、明かなる日

時を洩すことは叶はないが、程無く、そなた等の推察も及ばない、外交問題が因を爲し、結果に服して、醜態を盡國に流す彼等を、却くることは既に神定めになりある、殊にも、外交方面に於ての、窮迫せる大非事は、彼の亞米利加合衆國に對し、國際抗議を發せず、自然經過に委すこと、定めた。

次は露西亞との交渉である、是れ亦た、將來皇國の大禍因となるべき所の、最も不利なる條件を容認して、纔かに表面の利益を獲得せんが爲め、殆んど主客顛倒の協約を結ぶべく、内定した、斯る非違が此れより重り、彼等が要路を退くのは、聊か憂ふる所にあらねど、此危機に立てる皇國民をして、將に失墜せむとする、この大墮落より救はむが爲めに、大變動を興へらるゝこと、爲つた、其れは何であるか、亞米利加合衆國との問題にあらず、日露の交渉では猶更ない、近く支那大陸にも、大變亂が勃發するが、此問題でもない、此は外ならぬ、今年の收穫の終りし所にて、盡國の農民が大運動を起す、此秘密大計畫である、而も現界に於ける、此事の起りは、前きに司

直に立てる知名の輩が、野にありては密かに、大運動の主腦を操縦して居る、是れは近く將に、皇國を襲はむとしつゝある、彼の米國の爆撃飛行隊に次ぐ、懼るべき事柄である、此事一度び勃發せむが、今度こそは、彼の諸外國に、往年勃發せし、反亂等を以て比することの出来ない、幾んど海外に類例がない、況むや我皇國には例なき、非常なる状態を呈する、大變亂が實現する、警備の徒、仄かにも之を察知し、皇國の爲め、眞に此告言を信じ、參到るに於ては、神筵を更め、密かに此企み事の本末を詳かに示す、今は此を以て已む、詳かに洩すこと叶はぬ。

公事以て、之を未然に防止する所の、方策處置、そなたは如何に存する、(盛隆之に對する方策の腹案多少是れあるも、今此席上にては申上難ければ、更に御降憑を仰ぎて具さに御答申上げむと白せしに) 好矣。

今一つは、そなた等が、専ら力を注ぎつゝある、かの大編纂事である、あれこそは、一度當局に於ても、論議を醸すに至るが、正論多數を占めて、事なく通り、全國に大

輿論を形成することとなる。

亞米利加合衆國との國際問題は、來春、彼の地に住む所の皇國民が、大屈辱を蒙る、此際司直のみならず、全國民が徒らに、紙上の數字のみに囚はれず、猛然起たざれば、國家の内に孕む所の此大禍因を、轉換中和すること能はざる窮極に陥る。

此は邪神邪教の徒が、道を押廣めむが爲め、徒らに虚構する如き變革説ではない、舊くより定まれる所の運命でもない、咸く司直並に國民の、無道非違より來る所の、天理に反するが爲めに醸成せし、急變相踵いで實現する、此は已むことなき事態である。

各自一年を出でずして、殆んど斯の如く、晏居することは出来なくなる。



速振磯田大神

神詔

(九月十四日夜神筵)

(此大神は、神典に現はれざるも、常に伊勢大御神の、高き御使神として臨まれ毎時神詔を賜へり)
 大詔を畏みて、速振磯田現れ出でぬ、今度は諸方面に係る重要事、神律を措き、理解適ふ程に言辭を洵げ宣り示す。

彼れ新宮に鎮む、日穗子(明治天皇御神名)の神靈、中つ國(皇國の稱)を、専らに護り導く重き大命を荷ひ、諸方面の事共を措き、眞具さに大内を神教以て正す、其が便方を計りし勤務、大功績となりある、此深き事理能く辨へよ。

今度は、内は國民の中に、魔神に犯されて、逆心涌き、神を蔑視し、逆事企む徒、後より後と四方に湧き起ち、司直等、如何に厳しき手段運らすとも、之を防ぎ免せること叶はぬ、其が理由は、大内に仕ふる輩、司直の輩、皆世柄に惑ひ、正道を踏み違ひ、小賢ら立なすが爲め、大内の威徳能く、逆心者を信服すること叶はぬが爲めぞ、今の状態は最早、人力以て之を直裁に匡すこと叶はぬ。

諸人の生活の基爲す、鄙に住める耕す業の男子等、深謀に惑はされ騷擾爲す。七年

前四方に騷しく騷擾起ちし、彼の騷ぎにも勝る、勞働以て家業と爲す徒、彼の可厭き、外國より入り越せし、神教の邪教徒に唆り立てられ、彼れ東の兇暴の國(米國)と、戦ひ構ふることは非事と煽動起ち、彼の西の風除けの陸地(支那)の動亂に關係ひ、此中つ國の雄々しき民共、彼れ東の兇暴國を一時に討てと雄叫び起す時、今示すが如、邪宗徒反對の煽動起ち、諸人を惑はし、荒び立ち、皇國の直進き向ふ大道の障へを爲す、其をこそ、近く十二月に湧起る農民騷亂、己に根ざしある、外は、彼れ西の國(支那)、今度こそは、大騷亂渦巻きて、爭論ひ三に分れ、背向恒ならぬ彼の輩、三黨派一派に團結り、最と我國に親み深き、彼の軍將(張作霖か)と、相對ひて戦ひ、彼れに密やかに手添もあれど、戦況悪くなるも、根據は破れぬ、此月を越して勢ひ盛り返し、己が本據を出で、北の京を乗取るに至る。

外國の者共の集ひ居る、彼の南の都(?)も、兵火に掩はるゝに至る、斯くて入亂れ事曲折指す、斯る間に、彼れ東の夷(米)西の端大國の夷(英)手を聯ね事構へ、

事重大となり、外國の居住ふ民共まで、禍ひに犯されしは、彼の後背に、我國あるが爲めと。虚構事列ね陥いれ、我國の司直共、進退き叶はぬ状態となり、正義の爲めをれまことに遣はせし軍艦、數多の軍隊も、非事と誹らるゝ口實になる。

斯くて眼前狭まりある愚なる民共、野心ある政客共騒ぎ立ち、今の司直共身を退かねばならぬこととなる、此は大非事、我が神等、今の司直を惜むにはあらぬ、是は國內を處理治むるが爲めの深き神慮、斯く成らぬ前に、太綱締め、可厭も者共を引寄せ、善處手段を指示し、若き皇太子の手添へ爲し、國の危きを防がねばならぬ。

此現世の人手の便方は、其方共氣疎し、なれども、今度の編書此は善舉矣し、之を以て一道の便方付く、斯れば機會を遁さで、一時に奮ひ起ち、者共を引据へよ（有力者を本道に集はしめ神の教を受けしめよとの意）。

斯くも内外身動きならぬ程の大事迫りあるにも拘はらで、今度は奇びの理あるが爲め、經濟界は、翌月より、來年の卯月（三月）まで勢ひ立ち盛り立つ、此も辨へ置け。

司共或は機縁共を除け、直接に大内よりそちに事實し爲さしむ、準備調ひあるか、差迫りて、斯る可厭き家屋を立退きて、神殿を壯嚴かと爲せ。



天懸武日穗子大神、神詔。（十月十日夜神筵）

萬の事相は、久しく籠りて、吹き出づる程力勝り、一時に破裂なば、善惡其祥を問はで、結果大かなる者、そち共現世の事計り以て、推し測る事叶はぬ大事、愈運ぐり迫り、神手を人手に移して、裁斷ねばならぬ危機ぞ運ぐり來つる、斯る重き務めをこそ身に荷ふて、皇國の根固めに勤み爲す、大依言を、大御神より選ぎ任され、神氣吹の掛れる身柄、現世の支障は暫し撓まで勤み呉れよ。

現世の手段運らす其が支辨は、形成す機縁こそ、そちが今度の擬へ文（宇宙の統一を指し給ふ）此事ぞ深く嘉する、早々出せ、一時に信じ爲さしむ、能く辨へ爲せ、稚

皇太子は胸靈開けて、雄心振り起す。

西邊（支那）醜草戦ぎ立つるは、可厭き状の如見ゆるも、天地綾に運りて、我國の肢股踏みならし、向立ち雄心振ふ、好き便方とこそならめ、歎かはしきは司直共、今も猶眼暗み、腕差し伸べて真直ぐに進む、眞の事理辨へなし、なれども是も亦暫し、吾れ種々言依し直接に指示し、事營ましむる機一時に迫り來む、彌々勤めよ。

殊更なるそち共が勤み事は、稚き皇太子が、身の周圍に差迫る、枉雲を拂ひ呉れよ、吾れ、奇しき様示しぬ、かの編書早々出せ、一時に道開く、此事遂ぐるまで、徒らに事を雜誌に記し、四方に散らすこと非事、深き理りある、是も亦能く辨へよ。

以上神憑神筵に關係せし人名及場所

神招人及問對筆録……………九 鬼 盛 隆
神 傳 人……………本 田 龜 次

筆 記 者……………内 山 正 平
筆 記 者……………右 田 顯 相
場 所……………東京市四谷區坂町三番地本道宣布會神殿廣前

宇宙の統一

神感著者 九 鬼 盛 隆

天體の奇現象、天文學覆へる

二月五日の午前十時であるから、平時なら、東南の方の牖を開けて、採光機を凝視め乍ら、コリンス博士は、各地より到着した、電信報告を見て居る時なのに、此頃俄かに、暖氣を催して來たにも拘はらず、今日に限りて、牖は閉め切り、おまけに牖掛けまで引いてある。

無線電信の、報告譯文を持つて、息喘き切つて、駈けて來た助手は、訝かしく思ひ乍ら、入口の扉を手荒く押開けて、研究室に這入つて見ると、三日も家に戻らずに、電子計と採光機とを、睨め通して居た博士は、羅摩僧の法衣の様な作業服を着けた儘、

紫外線採光機の前に立つて、助手の這入つて来たのも氣付かずに、異様に緊張した顔をして、何か考へて居る。

助手は、又何か新發見を創めたかと、想ひ乍ら。

『臺長、今東京天文臺から、非常なことを、送電報告して來ました。』

博士は、左の眉を悸りと動かし乍ら、手を差伸べて、エスベラント文の様な、タイプライターの刷物を受取て、讀み下す中に、見る々々、顔面に非常の痙攣を起して、而も眼は異しく輝き初め、棒立ちになつた儘、地の底で唸る様な、異様の底響きのあ
る聲で。

『さあ大變だ——愈々其れに相違無い。』

斯く獨語しながら、遽かに身を翻へして、電子計の前に歩いて往つた。

電信譯文を齎らした助手も、其内容は略ぼ分つて居たが、餘りに、博士の態度の唯ならぬに驚いて、質問の言辭も出ない、ふと視ると、石像の如く衝立つて、博士の凝

視めて居る電子計の測示針が、宛ながら、プロペラの如き速度を以て回轉して居る。

更に電信を默讀して居た博士は、急に顔を舉げて、前方の採光窓から、空を透して見ると。

『もう駄目だ——』

と、叫び乍ら、直ぐ後ろに立つて居る助手を、突飛ばして、廣くもない室内を、旋風の様に駆け廻り初めた。

助手までが、理由も無く、同じく一緒に駆け廻りたい様な、氣分になつて來た、それも其筈だ、一度び心の注意點を放して、空を仰ぎ、室内を見廻したならば、誰でもが、斯く狂ひ出して、駆け廻るであらう。

天體には、風の無い時の、遠くの火災の、火の粉が散つてゐる様な狀を呈してゐる、外も室内も、殆んど、空間と云ふ空間は、凡て黄色の光線で充たされてゐる、そして、室内のあるとあらゆる大小物體が、悉く非常な速度で、同じ位置を保ち乍ら、旋回運

動を起して居る、何と云ふ懼ろしい奇現象ではあるまいか、恐らく文献あつて以來、未曾有の怪事實である。

發狂したのは、グリニッチ天文臺長の、コリンス博士と、其助手計りでなく、總ての物、威が發狂したのであらう。

神明の顯現、大經綸の發端

大陸と隔たりて、寒流に近い帝都は、冬の末季、春と呼ぶ様になつて、水道のヴァルプが凍て付くやうな、寒氣の襲來するのが、毎年の例ひである、それが今年は、一月の末から、東南風でもない生暖ひ風が、都中を吹き回し、朝は花時の様な露が封ぢ籠め、それが廓然と霽れる、都人の心は、何となく浮き立つて、新聞紙などは、寫眞版まで掲げて、頻りと花信を報じて居る。

不審議がる人々も、小賢けな氣象臺員の、近海暖流の變化であるなど、言ふ、極め

て無責任な説明に満足して、皆浮れ廻つて居る。

此時に妙なものが現はれた、それは、帝都の一隅に、多年超世間の生活をして居る、敬神尊皇と云ふ、當時極めて世間離れのした、仕事をして居る、根強い誠心團があつた、其所から神詔と云ふ、寔に恐るべきことを、憚り無く書き連らねた、警告書が、全市に撒かれたことである。

何がさて、排日問題も忘れ、支那全土のボイコットも忘れ、近頃親類交際となつた露西亞から、出殻しの石油坑と、撈り盡した漁場とを貰つて、有頂天になつてゐる、都人士の眼に映らう、何麼して耳に這入らう、彼等は、又しても、神様の流言蜚語かと云ふ、簡単な片付け方をした。



其警告書は、次の様なものであつた。

警告

吾等、神命を荷ふて、茲に六星霜、此間常に皇國に係る内外の大事、咸く神示を未然に蒙り、大小幾んど實現せざるなく、國家の爲め、日夜憂惧すと雖も、蒙昧の徒に誤らるゝを恐れ、陰かに、神護の厚からむことを、惴惴するに已まりぬ、然るに、今回吾等は、峻嚴なる神示を蒙り、皇國存亡の危機に際し、到底黙する能はず、社會の誹謗は、之を期して、神詔の概要を公表して、國民に警告する所以なり。

神は今や、大經綸を天地に顯現して、人の天道に反せしを正し、人道を亂

せるを矯むが爲め、天象に異變を起して、四時の順逆を正し、地上を掃清せむが爲、神を蔑視せる人類に、大天譴を加らるべし、宇内の中心、人類の宗本なる、我皇國民は、第一に、正邪糾明の神撰を蒙ることを免れず、二月五日より世界の人類に與へらるゝ、天地の怪象は、懼るゝに己む、來る四月二十四日に亘りて、世界に湧起する大變革、就中皇國は、隙に乗せられ、平素世界を併呑せむと、爪牙を磨く、東方魔軍の襲來を受け、國基將に危殆に瀕するに至るべし。皇國を憂ひ、同胞を愛する具眼の士は、爰に醒覺する所あつて、速かに本會に來り、神命を奉じて、正道に復し、公私に處する道を講せよ、神威を恐れ、神徳を敬ひ、赤誠以て皇國に竭さむとする民、國內に充滿せば、國運回轉の神恵に浴するを得む乎、若是れ否

らすむば、地軸運りて、四月二十四日に至らざる前に、天日黒雲に蔽はるゝに至るべし。

八

皇都



中央氣象臺へ、上海の測候所と、濟州島の測候所から、何等の徵候なくして、突然大暴風が生じて來た、殊に、絶えず大地震の如き、震動音を感じるが、地物には、何の異狀も來たさぬと報じて來た、更に來る詳報も、同じ意味の報告だ、これが、二月四日の午後六時半である。

▼氣温華氏百十七度、氣壓計異狀を呈し、示度不明、地震計に非常の繼續震動を感じ、十二時間以内に、海嘯の伴ふ、大地震襲來の恐れあり、避難警戒を要す。▲……………午後七時

恚^{こん}んな警報の載つた、新聞號外が、全市に飛び交^かふたのが、既に其夜の十時である。恐慌來——大混亂——或は阿鼻叫喚など、言ふ、既^いの形容詞などを以て、この狀況を現はすことは、誰人もの、企て及ばざる難事業であらう。

滿都の街路といふ街路は、異様の嘔號を、發しつゝある老幼男女の市民で、ぎつしりと押し詰められて居る、中央無線電信局に、怪我人や即死者があつたのは、前年の大震災に懲^{こり}々した、外國の通信記者共が、各本宛て、手廻しよく、東京に大地震襲來すと、送信せんとて先きを争ふた、慌^{あわ}て方の激しかつた爲めでもあつた。

野天に秘密閣議を開く

九

氣温の上升、百十七度とは言へ、二月五日の午後七時頃、如何に内閣の後庭とはいひ乍ら、屋外に卓子や椅子を並べて、野天の閣議とは、近來稀な珍態である。

然りとは、皆地震襲來の際に於ける、避難の手数を省く用心か、極度の恐怖と困憊とに、何の方策もなき、大臣連の顔には、一人として血の氣のあるものがない、逕が剛愎の總理大臣も、大きな鼻眼鏡を外して、手巾にて額の脂汗を拭き乍ら、何の大臣に對つて言ふのやら、半ば呟く様な口調で。

『斯うなると、天文考へや、理學者など、いふ者は、何の役にも立たぬものじやなあ』引承け貌の遞相は。

『皆の言ふには、氣温の急騰から來た、電波の異状らしいが、反應は多少あるといふてゐます、何分天體の事であるから、何時回復しないとも限らないので、各方面に向つて、絶えず送信を續けるやうに、命じて置きました。』

『……………』

『いや一部には能くあつたことだが、斯う全國一齊に、通信不能となつたでは、各方の狀況が判らないので、手が出ぬわい。』

と、言ふのは、平時も著しい手腕を出したことの無い、内務大臣である。陸相は、身を起して。

『冗談じやない、吾輩は、此儘では、國防上の責任を負ふことは出來ん。』時計を凝視めて居た、首相は。

『皆さん、御前會議は、明朝になりませう、御都合もありませうから……、今日中には、準備が調ひますまい……。』

と、言ひ放ちて、沈黙した。

規律も恒例も、破られて居る、閣議の席である。

秘書官と、警視總監とが、つかつかと這入つて來た、總監は、内務大臣に對つて。

『宮城前の群集は、靜肅にして居りますが、其他の各方面の群集は、追々暴動化する様

な、危険状態に向つて來ました、報告に據ると、群集は殆んど、巡査の言ふことなどは、聽入れないので、各方面から、軍隊の手に委ねるより外か、始末が付かないと、言ふて來ます。』

内相、陸相は、一齊に。

『やあまだ、軍隊は出なかつたかなあ。』

狼狽を通り過した、暢氣な國務大臣ではある、秘書官は、總理大臣の側に立つて。

『閣下、一關大將でありますが一、閣議は承知して參つた、決して御手間は取らせぬから、直ぐに御目に掛らねばならぬ、重大用件だ、と言ふて、承知致されませんが……。』

暫く考へて居た、總理大臣は、不意に身を起して。

『會う——。』

と、言ひ乍ら、大臣連には斷りもせで、無言の儘、秘書官の先きに立つて、歩き出

した。

老將軍神命を帯びて首相を説伏す

幾分、枯槁の色は、容貌を襲ふてゐるが、眼には燃ゆる様な、熱誠の光を盈たした、一關陸軍大將は、劍櫛けんしを握つた儘、内閣の秘密應接室の中に衝立つて、總理大臣の入り來るのを待つて居た。

『御閣議中を心得乍ら、無理を申して——、早速御面會が叶い、仕合なことです。』と、挨拶を述べた、總理大臣は。

『まあ椅子に、御着き下さい。』

と、答禮し乍ら、腰を卸して。

『重大な御用件とは……。』

大將は、容かたしを正し。

『如何にも重大件であります、今日の状態は、これは何處したものです、嘗に、一帝國の危機ではありませんまい、これは俺は解つて居た、然し乍ら、今迄の世の中の人は、俺の言ふことを聽入れない、何時か判る時機があらうと信じて、沈黙して居つた、今日に至りては、最早秘密を守ることが出来ない、其れで急いで参つたのじや、此際は最非共、御承知を得る積りで、御勸めに來たのじやが……。』

總理大臣は。

『國防上の件ですか……。』

大將は、怫然として、色を作した。

『开座な牛優しいことではありません、此天地の大變化に際して、國家の危機を、善處すべき大方策——、いや大神命を、御傳へすべく來ましたのじや。』

茫然として、大將の顔を凝視めて居た、總理大臣は、猝かに顔面が緊張して來て、何か思ひ當る節があるらしく。

『いや御誠意を感謝します、御迷惑でありませうが、各大臣列席の所で、御説明を承る譯には参りますまいか。』

大將は欣然として、快諾した。

『俺の希望します所じや。』

總理大臣は、大將を、閣議の場所に伴ふた、彼れは、閣議の席上にて、如何なる説明をするにあらう乎。



策の出づる所を知らず、職分の手前、内心の恐怖を押し隠して、徒らに擬勢を張つて、危くも緊張を装ふてゐた大臣連が、兎角睥睨する如き態度を示す、傲岸不屈の、總理大臣が立去つたので、てんでに假面を捨て、始めて、人間味を味ふことの出來た大臣連は、沁々と、自分を睥むる様な、感傷的な氣分になつて、ほつと吐息をして居る所

へ、總理大臣は、猝かに希望に満てる様な顔付で、謹嚴其の者の如き——、皆々が、常に心中、竊かに畏怖して居る、一關老將軍を伴ふて來た。

人間らしい、感傷的の氣分に浸つてゐた、大臣連は、何故に、苟くも閣議の席上に、現官でない、閣員外の老將軍が、現はれて來たのか、想像だも付かない。

總理大臣は、自分の椅子の前に起立して、一渉り一同の顔を見渡し、例の重々しい早口で。

『諸君、失禮しました、さて見らるゝ通り、一關大將を御連れしましたが、秘密の閣議の席上へ、閣員外の將軍の、御臨席を願つたのは、將軍が我等に、國家に關する重大なる、警告を齎らされた次第です、乃で、私一人が之を承るよりも、諸君と一緒に御聽して、其事柄によりては、直ちに、協議が出来るかと考へまして、御出席を願つた譯です、此點を特に、御了解あつて欲しいと思ひます。』

と、斷つて、首相は椅子に、どつかと腰を卸した。

將軍は、一同に會釋をして。

『只今、總理大臣の、御報告になつた様な次第で、御邪魔をいたしましたんでありますが、幸ひ皆さんの、御了解を得たことを、有難く存じます。』

斯く挨拶された、大臣連、實は了解處か、今迄たゞ茫然として、二人の顔を、見較べてゐたのに過ぎないのだ。

常に、部下に對つて、推理推斷と、口 の様に言ふ、陸相が。

『此際、一關大將より、國防上の御注意を蒙るのは、洵に機宜に適した、感謝すべきことゝ、本官は信じます。』

恚う一番駄けに、口を切つた、然りとは氣の早い、何と呆れた、推理推斷ではある。首相は、將軍を顧みて。

『では、早速御要旨を承りたいですが。』

將軍は、椅子から離れて、轟乎と起つた、莊重を極めた語調で。

「俺は、今日、重要な報告をします前に、諸君に一應御訊ねしますが——、諸君は、斯る状態になりました今も猶ほ、神——神様といふことを、考へられませんか、内外危急の重なつて居る場合でありますから、或は存じ乍らも、考へられんかも知れません、然し乍ら、如何なる場合と雖も、諸君は豈夫や、皇室の畏き事は、御忘れに
なるまい、然らば、皇大神の、常に昭々として、吾等の上を照し給ふと云ふことも、御解りになつてゐる筈じやが……。」

餘りに反響なき、大臣連の顔を見渡した將軍は、暫らく沈黙した。

「本官は、皇室と、宗教との關係に就いては、特別の見解を有つてゐることを、自信して居ります、先づ第一……。」

今迄、瞑目して腕を組み、耳を傾くる様にして、沈黙して居して居た首相は、手を擧げて、文相を睨め付け乍ら。

「まあ貴官の説明はよい、一通り説明を聴きなさい。」

と、時候後れの、宗教論を制止した。

將軍は、椅子に腰を卸して、暫く俯向いて居る、聽て將軍は、肅かに顔を擧げ、儀容を正して。

「人事を竭して天命を待つ、と云ふことは、十分に手を竭した、後は自分等の手では、如何とも爲し難いから、成行に任せて、如何とも結果を待つより外に、仕方が無いと言ふ意味のものではありませんまい、俺が常に獨り考へて居りまするには、何事にまれ、神より與へられてある知能を、十分に働かして、人手を竭し、而も更に一歩進めて、神の御旨に副ひあるや、否やを恐れ窺ひ、更に大なる力を、神より加へられんことを、祈ひ願ふて、常に敬み畏みて萬事を處すべきであると、信じて居ります、然るに今の人等は、人事も竭さなければ、天命をも待たず、其時々々眼前の責塞ぎだけを行ひ、私をのみ營みて、時を過すと云ふ有様に見えます、常に斯る有様の人事の行ひ方で、何麼で神の御旨に副ひ、或は神の恵みに浴するなご、云ふことが出来ませう、今迄に

世の中には、内外共に、神の正道を亂し、種々邪曲の輩が出て、人を惑はして居る點がありますから、人によりては、皇國民にあるまじき、神を無視する様な、考への者も出て来る、然ども俺は、今日皆さんに、神の説教に參つた者じや無い、道義の頽廢や、世態人情の、墮落を極めて居るのは、強ち皆さんの爲されたためだと、言ふのはありませぬから、御互に今更致し方が無い様なものである、然し乍ら、御互が——皆さんも、神と云ふことは、頓んと忘れ、何事も人手を以て解決し、或は達成することが出来るといふ様な行爲は、何事です、一體我皇國に於ては、神に遠ざかれれば、當然皇室に遠ざからなければならぬと云ふことになる、此惡風が積り重つて來た結果、前年來、天災地異、凶事國難、相踵いて涌き起つ様に襲來する、之を突發的災禍など、辨へたならば、其れこそ大變な間違ひである、諸人は判らぬ迄も、せめて皆さんだけでも、是は皆、神の大警戒、且つ譴責であるといふことに、御氣が付かれぬといふことは、眞に迂濶極まる談である、所が皆さんは、世界は日に月に、科學の力に依り

て、天地の眞理が闡明されつゝあるでは無いか、人間が如何にして、神意を窺ひ、或は直接に、神の恵みを受けることが、何麼して出来るかと、言はるゝでありませう、今まで、東西の史上には、所々に纔か乍ら、奇蹟の如き神の力が誌されてある、乃で現在の事實に當つて調べて見ると、悉くそれが如何はしきものである。然るに偶々正しき事實が現はれても、正邪混淆されて、忽ちに一蹴される、それでありませうから、皆さんの辨へ無いことを、一概に責めることは出来ない、これは俺の畑違ひのことじやが、宇宙には、時間の制限と、距離の制限とが無い、其れ故に神は何物をも知り、何物をも容るゝ、然れども宇宙は、兒童の弄ぶ獨樂では無いから、回轉が止んで、獨樂が倒るれば、又他の玩具に移ると云ふ様な次第ではありません、神の定められた、宇宙の大目的に向つて進む間に於て、其大宇宙の目的を體現すべき、大任務を帶ぶる所の、地上の人間が、近來纔かに、宇宙神祕の一端を窺ひ知つた位であるのに、驕慢心を起して、斯の如き我意放恣の行動を爲すに於ては、神様は之を御見遁しになるこ

とは出来ない、是に於て神は、未曾有の異例を以て、大改正を爲さんがため、地上の中心たる皇國、人類の始祖の直系たる、日本人の或る者に、大神力を顯現された。』
 『大將が、只今御述べになりますことは、御自身の體驗に係る事實でありますか、或は又、第三者に係る、御經驗談でありますか。』

と、突然、法相は質問を挿んだ。

將軍は、徐ろに顧み乍ら。

『勿論、自分の體驗でもあり、また第三者の事蹟を實證する、經驗談であります、至誠は十分に溢れたる、人格者であります、宗教的の體驗は更に無く、専ら漢學に精通せし、殆んど世間に出ない、憂國の士がありました、尤も此人は、皇大神を敬信する誠は、人一倍ありまして、我國敬神の大道が、日に廢れ行くことを、非常に慨いて居つた趣きであります、然る所、去る大正九年の頃、意外な動機が生じまして、從來の研學を、幾んど棄て、専ら我が惟神の道を研究し初めた折柄、正法に不審議無し

など、云ふ、單純な片付方をするを許さない、怪異の事實に頻りに遭遇し、同時に不審議に靈眼が開ける様になつて、彌々神靈の實在を體驗し、又其れ々々の道を以てすれば、神靈が現體の人に憑らせ給ふと云ふことも、十分に實驗した趣きであります、斯る所へ、殆んど奇蹟的の事情を以て、神靈が自由に御憑りになることの出来る、一人の男子を與へられたのであります、即ち是れが、大神が地上の現身を藉りて、大顯現を爲さんがために、根本基礎を作らせ給ふたのであります、此れは後に、矢張り神示によりて判明致した事實であります、此人々は、畏くも、神功皇后の靈統を稟け來れる身體で、乃ち世にも稀なる靈能を發揮するに至つた次第であります、其れ故、此兩人が一所になつて、修法を致しますると、屢々大奇蹟を示されたのは勿論の事、大神等の神靈は、何時でも喜んで御憑りになり、天地間の祕密は申すまでも無く、既往に遡り、現在は無論、將來に跨りて、實に前人未發に係る種々の大事を、御示しになります、殊に今述べ來りました通り、大神は元來、自ら墮落せし全人類を拯ふて、

復び古への善美に還させ給はんとする、大革正が目的でありますから、地上の中心たる我日本、人類の根本たる我皇室、此二つに係る重大事は、神憑り毎に御示しになつて、或は警告、或は豫告、又は人事の善處を以てすれば、避け得ることの出来る事柄は、其手段方法等、常に細大漏れなく、明示さるゝのであります、先づ近き實例を挙げますと、これは俺自身も、別方面より知つて居る事でもあります……、彼の前年、殿下御渡臺に當りて、非常なる危険な事の、陰企陰謀れてあつたことは、皆さんも御承知の筈じや、神は之を御警めになつて、此御渡臺を、人手以て出来得る限りは、極力阻止せよとの仰であつたのであります、然るに此人々等は、最も敬神愛國の念の篤い、僅かの同志で、堅固な一つの會を作つて居りますが、前きに申ます通り、怪氣な新宗教や、卑しい布教者共と違つて、常に神命の餘りに重大なることに、恐れ畏み、徒らに自家宣傳を致しませぬから、所謂いはゆる、權勢家と稱さるゝ所の、俗悪なる連中には、殆んど知られて居らぬ、乃で幾重にも急に追つて、阻止運動が出来ない、是に於

て、彼の人々等は、明治神宮に參り、自分等の身命を賭して、畏くも、大神より特に授けられある、祈禱の大祕法ひみつを修し、御安泰に還啓せられんことを、御祈願致したのであります、恐多くも、明治天皇の御神靈は、之を非常に御嘉獎になりて、あの如く、御無難に渡らせ給ふたではありませんか、殊に前年の震災火災の如きすら、四ヶ月も前に御警告になつてある、是れは或る程度まで、世間に廣まつてある事柄でありますから、皆さんは御承知でなければならぬ筈じやが……。』

老將軍は、興奮せし眦まなこを上げて、大臣連の顔を見て、一渉り睨め廻した。始終瞑目して、耳を傾けてゐた總理大臣は、眼を開いて、思ひ出で貌かほに。

『いや承知してゐます。實は其他の事も、仄はかに聞及んでゐます。』

斯う言ふ、總理大臣の答辨に、各大臣連の驚いた狀さまの、表情に似氣ない將軍は、獨り首相の顔を睜みめて、然りとほ迂濶まがなと、言はぬ計りの呆れ貌がほ。

首相は、屹然たる態度を以て、將軍に對ひ、再び質問を發して來た。

『御説明中ではありますが、自分は斯る問題に對しては、決して等閑に付して居つた次第ではなく、寧ろ研究的態度を以て、今日まで十分注意を拂つて居りました、乃で吾輩の考へとしますると、今も大將の御説明の如く、斯る大使命の下にある、彼等であつたならば、今日迄に、既に社會人心を支配し、大多數の信仰者も作り、所謂奇蹟的に、實績の擧るのが當然であると信じますが、調査をして見ると、さう云ふ状態は、少しも見えませんが……』

將軍は、極めて眞面目な面持ちで、首相に答へ始めた。

『いや一應は、御尤な御訊ねであります、俺も最初は、御訊ねの通りの、考へを懐いて居つたものであります、然るに今日、是れぞ正しき大神である、正しき神祇である、身命を賭して、絶対信仰を起して來た理由が、其點にあるのであります、乃ち今日迄數年間、斯る大任命を承け乍ら、從來幾多の宗教者に見るが如き、弊風は、もなく、殊に神よりは、常に非常なる祕密を洩され、或は殆んど、奇蹟的に、種々な法

術祕事等を與へられてあり乍ら、之を以て聊かも自己を飾らず、一般社會に沾らず、而も非常時に際しても、世の誤解を恐れて、黙して已むと云ふ状態であります、故に御訊ねの點は、却つて悉く、これが眞正確實なる、實證となる所以であります、強いて原因を索めて、罪を嫁せんか、眞の敬神愛國の至誠を失つて居る、朝野の人々は、直接已れを利すべき事柄にあらざる理由を以て、斯る國家の大事を、今日迄等閑に付して居つたと云ふ所に歸着するより外ありません、至誠以て神に伺へば、一家一身の一小私事と雖も、委曲を盡して、其方途を諄々と説き示さる、況んや、君國の休戚に係る大事などは、悉く神命に依つて處置すべきものであると、俺は信ずる、これは積年の非違を神に謝して、一々天命の定まる所を神に伺ひ、又之れに處すべき方策は、威く神命に依るといふことに行つて來たならば、國家は今日の如き、窮迫の極には陥らなかつたものと信じます。』

將軍の戒飭的語氣に對し、又自己辯疏の爲めに、顛倒を來せる、彼れ首相は、日頃

の態度にも似ず。

『今日斯る状態の時に、諸般の事柄を神に質して、吾等の善處すべき、神命が下りま
すか——神には方策がありますか。』

何と云ふ慌てた、頓狂な質問ではあるまい乎。

將軍は、蔑むより、寧ろ惑むと云ふ様な、眼指を以て、首相の顔を睜め乍ら。

『いや恐多いが、俺は神様の御仲間でありませんから、有るとも無いとも、俺にせら
れた質問であつたなら、御答へ申す譯には參らぬ、乃で俺から更めて御訊ねしますが、
職責上よりして、貴官を始め、皆さんは、此危急に處すべき、御方針が確立されてあ
りますか……、自然現象は、是れは世界一般の事柄で、不可抗力としましても、其結
果、國々に生ずる所の變事に對しては、其國家の主腦者たる者が、之を處理して以て
國民をして、危きより安きに、善導すべき大責任がある、先づ貴官方の、御方針を承
りたい。』

已に狼狽と悔恨と、恐怖とに襲はれた首相は、日頃の豪快不遜の態度も何處へやら、
殆んど、憐みを請ふが如き、沈痛な聲で。

『其御訊に對しては、遺憾乍ら、天變が伴ふて居る爲に……まだ何等具體的の方針が
確立しないと、御答へする外ありません、尤も明朝迄には、御前會議を開催しなければ
ならぬので、其れ迄に、具體案を纏める積りで、協議中であつたのであります。』

總理大臣は、正直にも、無策無方針を告白して、將軍の前に白旗を掲げたのだ。

將軍は、肅かに聽き了つて。

『そう率直に御話しになれば、俺は此際特に御勧めする、極めて祕密にせば可いので
あるから、斷然、體面や擬勢を棄て、神の下に到つて、今迄の非違を謝し、即今危殆
の迫れる、我帝國の執るべき方針、國民の處すべき道を、神に質して、皇大神の勅命
を戴き、一々神命に本いて、時局の支持を計られては如何でありますか、これは俺が御
勧めするよりも、寧ろ貴官方より、此際進んで求めらるゝが、當然であらうと存する。』

首相は、將軍に答へずして、大臣連一同を見廻し乍ら。

『今、御聽及びになつてある通りの事實が、儼存してゐる次第であるが、諸君の考へは如何でありますか、各自の御意見を、一應申述べて貰ひたい——。』
『……………。』

『これは、一關大將に御訊ね致しますが、其神様々と仰せらるゝのは、一體如何なる神様を指してのことでありませうか、其また團體は、如何なる目的を抱いて、集合して居るものでありまするか、此際御明示を得たい次第であります。』

苟くも、一國の文教を司る文相としたことが、餘りと言へば、呆れ果てたる質問に、
追の老將軍も、少時、無言の儘、文相の顔を凝視めて居る。

聽て將軍は、軍服の襟を開いて、内隠しより小冊子を取り出し、儀容を正して。

『大分時間を経ましたから、俺が、長談議をするより、此を朗讀した方が、御解りが早いじやらう、畏くも、これは神の御勅諭でありますぞ——。』

三三の誓言

一、吾徒は、皇國の古紀教典も、外國の古典も教學も、神の隨に折衷し大正して、神告事を敬承服き、彌信しに信し、百般事理、其眞否を論はず、神勅に赤誠を捧げ、一向に遵み奉る。

一、吾徒は、天つ日の光を蔽はれむ砌、温熱の絶えなむとする程の擾亂爲す砌、四方の海洋の斑氣者襲ひ來む折、現身は愚か、一家一族も振招ぎて、國の御柱護り固め奉らむ。

一、吾徒の、勤務爲す諸業こそは、惟神本道を布き宣べて、風教を匡し、世界を一圓め、平けく安けく、榮えしめ給ふ大神業を、善美しき事と信じ奉りて、遵むことの便方と、勤み奉らむ。

八條の教

- 一、惟神本道は、全世界人類の等しく信奉すべき、大真理なり。
- 二、日本國民は、敬神尊皇の大事を、専ら擅にすべからず。
- 三、天地各中心あり、相對持して、即ち循環す。
- 四、御中主神の統べ治む、諸神に上下あり、各階級存す。
- 五、天地の真理は、中心と差別を存す、無差別に、眞の平等あることなし。
- 六、科學の進歩は限あり、靈導を得て、眞の開發を見るものとす。
- 七、方今風教の頽廢は、神を敬ひ長を尊ぶ誠、滅せるが爲なり。
- 八、本道の實現は、神人對話、未曾有の大事なり。

「御解りになりましたか、畏くも、天照大御神が、此人々に、常に御影を映せ給ふのでありまして、其目的事業は、今朝讀しました、此の三の誓言に示されてある如く、此の第一項に於ては、専ら敬神の本義を示し、第二項に於ては、尊皇の大義を教へ、第三項に於ては、其本務と目を明示されたもので、是れ皆皇國民の齊しく、遵奉躬行すべき重要事であり、而も是れは、此の團體に於て、漫りに制定作爲せしものでなく、今申す通り、大神より直示されたもので、就中、此の第二項こそは、皇國臣民一同の、堅き信條と爲さしめて、皇室の稜威を輝かせ、國基を固めて、八條の教典を、全世界に宣布して、我皇室の統一の下に、全世界の眞の平和と、榮福を圖ると云ふ、大神命を奉體して、日夜奮闘して居る團體であります、現に俺が出て參つたのも、實は一己の差出口ではありません、神命に依つてのことでもあります。

と、言ひ乍ら、一片の書狀を、恭しく推戴いて、兩手にて捧げ持ち、音叶朗々と讀み上げた。

神 詔

吾れは、□□□□、今度、大神の命以て、此神筵むしろに參到らしめたる、彼れ猛者に、殊更なる神詔みことごを言依す、今天地の異なれる變象さま、國の内外の状態は、神謀り神定め、經綸しぐみの儘の現れ事なれど、奇しき神業加へあるが爲め、迂濶うづつけき民共、神威かむらの畏き趣さまを得曉らで、戦き慄れ擾亂さほ甚と深きも、此は徒らに懼れ爲すに及ばぬ、時經なば自ら事鎮しづまる。

而も今一時も忽がせに爲すこと叶は大事は、彼れ東の強暴あつらしき夷國は此騷擾さわぎを好機よしばと爲し、大軍備おほそなへ以て、一時に我が日の本を薙ぎ伏むと、大謀略たたくみ、既に事成りぬ、司共國民も此を得覺り爲さで、海陸軍事、非

事嵩み事違ひ、防備もりかた皆用を爲さぬ、今日睫まてかに迫る大枉事、大禍雲群り打寄せ、大内の光を蔽ひ、國の礎いづもを動搖ゆろがす、危く險しき態愈々薄り來ぬ。

迂愚うづけき輩の戒めも、事足りぬ、速かに、猛者を司共の許に到らしめ天懸あまか武日穗子たけきひほこのおほかみ大神の神詔みのりを承け、事々善惡さかを究め、善く處置しおきなさしめよ、早々、誠め導き爲せ。

『恐多くも、斯る神勅を奉じて參つたのじや、總理大臣には、速かに御一同の意見を御取纏めになることを、希望致しまする。』

斯く述べ畢りし、一關老將軍は、甚も緊張せる狀で、復び恭しく一禮して、漸く椅子に腰を卸した。

『いや能く解りました。』

と、點頭しながら、聊か解つたらしくもない面持の文相を、後り眼にかけ、總理大臣は、將軍に對い。

『御覽の通り、閣員一同は、異議の無い趣でありますから、此際は私情を抛ちて、神命を奉體し、最後の御奉公を致したいと思ひます、宜しく御幹旋を御願ひ致します、小官は一同に代りまして、更めて、御盡力を感謝致します。』

將軍は、凱戦式以來の晴やかな、満足貌に、莞爾と笑みを含み、起立し乍ら。

『國家皇室の爲め、洵に満足の至りであります、不肖老骨を投げ棄て、身命の續く限り、努力することを誓ひまするじや、斯く決定しますれば、時間が経過つ計り、皆さんは、今から直ぐ、俺と同行が出来まするか。』

首相は直ぐに、服装を正して。

『御同伴を、御願ひします。』

嘗て前例無き、奇觀を呈した閣議は、遂に閉された、首相は直ちに、秘書官を招き、自働車の發車準備を命じた。

はて、無線電信まで、不能に陥つてゐる、此強烈な電波の變化に際して、エンジンのマグネットは、スパーク作用を爲すであらう乎。

内閣各大臣行衛不明となる

黄昏時の様な空色で、怪雲は非常の速度を以て、東から西へと流れてゐる、其の雲の切間々々より、現はるゝ天體は、宛然、火事の様な景である、而も氣温は、百十七度、此の状態が、若し續くとしたならば、人間は、極度の發汗と、心氣亢進とによりて、涸渴の果は、恐らく、皆斃れて了うであらう。

當局の、手拔かりだらけにも拘はらず、各方面の、暴動的群集が、追々に鎮靜に向ひ、或は解散し初めたと云ふのは、相對引力の、急激な調節平均より來る、心理状態

の激變にも因るだらうが、群集は多く非常な燥きと、疲勞を感ずるとによりて、何處にも仕方が無いからである。

通信機關の杜絶から、活動の大半を削がれた、新聞記者連は、秘密閣議の内容は兎まれ、大臣連の、様子だけでも探聞せんと、群がり寄つてゐるが、誰一人として、記者室に居る者はなく、前裁から門前に跨つて、汗を拭き拭き、下馬評の限りを盡して、模様如何にと、待ち疲倦れて居る、折柄、各大臣の自働車の、何れも、エンジンを掛け初めた、運轉士連は。

『やあ大變だ、マグネットが駄目だ。』

一齊に叫んだ。

それ閣議が終つたと、我れ先きに、屋内に闖入せんと奔めく、記者團の前に、秘書官は、駈け出して立ち塞がった、彼は、手を舉げて制し乍ら。

『記者諸君に報告します、臨時内閣會議は、今日は、具體的に決議を得ずに解散しま

す、總ては、明日の御前會議に於て、決するでありませう、電波異狀の爲めに、自働車のエンジンが利かなくなつたので、各大臣は是れより徒歩で、各私邸へ引取られま

す、記者諸君も、一時引拂つて頂きたい。』

斯く述べ了りて、引込んだ。口善悪なき、若い記者連は。

『行詰りの立往生歟。』

『愈々内閣抛げ出し歟。』

『閣議に呼ばれて來た、珍客は何處した。』

など、一頻り、雑話ついたが、氣早やの連中は、各大臣の歸邸を擁すべく、出駈けて往つた、時計は午後九時を、僅かに十分前を示してゐるが、光線は日中と同じである。

斯る天文学を破壊した、異狀天體は、恐らく、世界に亘つて、晝夜一日の時差があつた、東西兩半球の夜を、等しく奪つたものと見える。

上空、殆んど、五千メートルの高度を保ち、未だ曾て見聞せしことなき、異形の飛行機、約二百臺、南方に向つて、非常の怪速力にて、飛走せし趣なり。内閣夜逃けの帝國國防は、此際、國民各自の奮起に恃たざる可からず、今は帝國の危機、刻々に迫りつゝあり。

因に、電波異状の爲めに、自働車の運轉すら不能なる折柄、高空飛行の可能なる、怪飛行機は、そも如何なるエンジンの装置されしものか、現時斯の如き發明を遂行するは、必ず×國ならん、×國飛行隊は、決死の遠征を企て、我が島帝國の一端を、襲來せるものならん。

騎兵の活躍

陸上戦闘に於ては、各種の通信機整備せし爲め、陸軍部内に於て、頻りと、

騎兵無用論唱道されしものなるが、昨今の變亂に際しては、軍事行政の諸通信は勿論、民間經濟上の重要通信に至るまで、無用と稱されし、傳令騎兵に依りて、稍く通信聯絡を保たれつゝあるは、寔に皮肉なる。面白き現象にあらずや。

通信機關の破壊、傳騎の活躍

鷹は風に逆ふて翼を打ち、鳩は風に乗じて翔ける、小禽自ら天地の妙機を識る乎。前年大震災の際、日頃遊戯的な、陸軍飛行隊は、極めて冒險的、通信任務を遂行して、通信機關の破壊されたる折柄、大に功を奏したのであつた。

斯くて、陸軍部内に於ては、一朝有事の際、内地の通信機關が、遮斷された場合に於ける、通信聯絡保全としては、極めて姑息幼稚の手段ではあるが、傳騎に依る、送次聯絡、徒歩潜行聯絡、住民托送聯絡などの方法を立て、研究も行ったものである。

それが飛行機採用以來は、有事の際の非常通信には、是れこそ、最も有功なるものであると著眼して、研究に著手したのは、賢明でないとは言はれない、それが愈々實地に驗す好機會が來て、震災時に於ては、遠近の飛行悉く成功して、各地よりの、戒嚴用兵出動や、近縣各方面よりの、救援動作、皆敏速に効果を奏したので、當局は、大天狗であつた。

風に乗じて翔る鳩を睹て、鷹は何時でも、風に逆つて、翼を打つことが叶ふと信じなければ、それは餘りに愚な計畫である。

飛行通信をのみ、無上の妙用と信じたのも、同じ迂濶さと謂はねばなるまい。

自然現象の變態が、原因を爲して、人心が變化し、暴動化した帝都の、秩序を維持すべく、慌て、戒嚴令を布いた當局は、參謀本部の、仕事が生じ様とは想はない。

折柄、一傳騎の齎らした、報告に驚愕して、騒ぎ立つるのは、惟り戒嚴司令官と、參謀本部とのみではない、何時も自分等の計畫より、外に妙策一も無しと、自信のみ

強き、自稱モルトケ連の眼を覺す、起床喇叭ではあるまい乎。

帝國の陸上國防を、統裁するのみか、場合によりては、東亞に於ける、軍事行動一切を、統轄する程の權威を有せる、參謀本部が、總ての原動力とも謂ふべき、唯一の無線電信が、不能と爲つたために、軍事命令の發動が、不能に陥つて、最高の秘密圖室も、今は地方聯隊の、戰術講話室にも劣る、状態となつた。

航空標識圖を睨め付けて居る、無言の參謀總長に對つて、航空課長は。

『非常航空線があつた所で、機が動かなくなつては、仕方ありませんなあ、方略を構成した所で、命令を傳達することが出来ませんから、殆んど、圖上戰術に終る有様であります、故に今第二部では、先づ急速なる、傳令方法の、調査をして居ます。』

『……………』

今や、地上人類の、大腦であり、眼であり、耳であり、且つ舌である通信機關が、破壊されたのであるから、一切の活動が停止するのは、無理からぬことではあるが、

妙を極めし、各種新武器を操縦する、特科兵八萬、豫備後備總數、九百萬の實力を有する、我が帝國の陸上軍備は、今や其聯絡を斷絶され、自由なる、各個運動を起しつゝある、此儘に統一機關が、何時迄も回復しないならば、天體異狀よりも恐るべき戦雲は、東亞の天地を鎖すであらう。

著々改築された舊要塞、新たな築城、果して能く、敵の砲火を防禦し得る、堅塞なりと誇り得るや、而も機動作業、悉く電流に因るが爲め、今や機關の動作は、停止して居るではない乎。

帝國海軍の大缺陷

(海軍故名将の靈神命を帶ひて現著者に告示の譯文)

一千萬の貔貅を有する、帝國の陸軍は、其精銳、世界に誇るに足る。然れども、大海原の眞つ只中に浮ぶ、日本帝國は、徒らに陸上の雄者をのみ夢みて、四面環海たることを忘れてはならぬ。

力を外に伸べ、威を内に備ふる者、一に海軍力の完備に待たねばならぬ、大勢は運移りて、我が島帝國の國防基調は、寔は第一に海上に置かねばならぬ、惟り我帝國のみではない、世界各国、幾んど、其盛衰興亡の根元は、繋りて領海防備の統一と、海上權の確保にあるのだ。

數百の艦艇が、狹隘なる灣内を壓して、分列旋回を行ひ、或は二萬三千噸の、大戦艦を先頭に、超弩級大戦艦が、單縦陣の大迂回を爲しつゝ、艦砲射撃を行ふ状は、壯觀極り無きも、それは尙武的、遊戯心を満足せしむる、一幅の畫圖に過ぎないのだ、海岸線の延長せると、要港地帯の多きことゝ、防禦海面の區域の廣きこと、世界に冠絶せる、島帝國は、今や艦政方針の過てる爲め、海上防備の、大缺陷を暴露する時が來た。

世の人々は、何の時代に、何の國と戦つても、我が帝國は敗けたことがない、殊に日本海海戦の如き、有史以來例の無い、大捷を博したことを、誰もが、口癖の様に誇

つて居る、いや必ず負けない力があると、信じて居る、然れども、其は威な、勝ち得べき素質が、具はつてゐたからだ、僥倖と云へは言へないこともないが、精錬鐵の如き、當時の將卒は、人力の有らん限りと竭し、其れに絶大な、神の冥護が加はつたからである。

然るに、今日の軍人氣質は、以前の様な、剛健質實な、而も奉公心の篤い氣魄が、存してゐるであらう乎。

其上人事も竭さずに、今後も亦、柳の下に泥鰌が居ると、思ふてゐたならば、それこそ、秦を亡ぼす者は胡なりと云ふ、筆法に陥りはすまい乎。

一千八百九十七年以來、英獨兩國の海軍は、互に大戰艦創造を競ひ、續いて後進の米國が、勃然として擡頭し、皆大戰艦を造らなければならぬと云ふ機運が、全世界の海軍に漲つた、而も米國の如きは、其富と工業との威力を發揮して、續々世界に冠絶せる、大戰艦を建造したのである。

唯り流行に後るゝを恥として、粉飾を凝らす、令嬢や貴夫人をのみ、嗤はれまい、文明國の進運に後れたくないと、前後も顧慮せず境遇と身體に應はしからぬ、流行を逐ふのは、我が國人一般の悪い癖である、我國の海軍も、御多分に漏れず、大艦巨砲主義に感染^{かぶ}れ、上下擧つて、やれ八六艦隊だの、八八艦隊だのといふ、嚙語を口にする様になつた、元來、大戰艦なるものは、遠く本國を離れた外洋に於て、多數の僚艦を率ひて、一擧にして、敵艦と勝敗を決する時に於てこそ、必要なのだ。

我が帝國は、將來、世界を統一して、平和の風を、各國要港に戰^まよがせ、白波穩かに眠らしむべき、大使命を帯びて居るのであるから、海軍の威を保つ上に於て、必ずしも、大艦巨砲が、不必要だと言ふのではない。

然れども、現下帝國の、急切なる任務は、海上防備、即ち海岸線の警備である、故に快速力を有する、巡洋戰艦を以て、主腦艦隊と爲し、之に附隨せしむるに、最も輕快なる、驅逐艦を以てせねばならぬ、殊に驅逐艦の海上任務は、交戰中に於ける區域

の牽制と、及び秘密根據地と、艦隊との聯絡保全にあるのだ。

近く太平洋上と、南洋上の一點に於て、主力艦隊が密集の儘、海若を驚かす、狂瀾怒濤を沸き起たしむる、運命の避くべからざることを、我が海軍當務者には、夢にも氣付かぬらしい。

更に眸子を、艦隊編成の方面に轉すれば、密集編成、艦種類別編成、是れ皆大非事だ、尤も、海軍主力の一點に集中して、大活動を行ふ場合、島帝國の海岸線の警備を、残らず空虚にして置く積りなら可いが……。

それとも、帝國海軍は、何時も瀬戸内海を遊覽したり、支那海方面で運動會を催す爲めに、設けてあるのだと、思つて居るのか……。

殊にも、彼の材料の置場は、策を過つて居る、若し一朝有事の時に、痛切なる手違ひを、直接に來すべきは、燃料貯藏所である。

此等の經營が、悉く間違つてゐる。就中、本州の南端、及び西海岸、九州の東南端、

朝鮮鎮海灣附近、北は樺太等に於ける、海軍の經營皆な用を爲さぬ。

序でに今一つ驚かして置かう、さあ何うだ、海軍當務者も、理學者等も、日本全島、海岸より海上十六哩の間と云ふものは、海水の比重と、水壓とが、二十四時間中に、四回異なることに、氣が付いてゐるか、いや一人も研究に係つて居る者がないではないか、そして、潜航艇を時々沈没させても、平氣で居るとは……、此はまた何と云ふ迂濶さであらう。

科學の見落せる、神憑靈告。

有らゆる物體の、旋回運動は止むだか、空一面に橙色を帯びた、灰色の雲に蔽はれ、太陽の光りは見えずに、黄色の光線に充たされ、氣温は息詰る程に蒸せ熱い。

老樹は鬱蒼として蕃茂し、池に清泉が湛へられ、帝都の近郊には珍らしき、茅葺の蓬味のある建物、如何にも、周圍の風姿に應はしく、常ならば如何計りか、閑雅な清

なすべき境内であらう、然し今は、巨人が沈黙に耽つてゐる様な、重くるしい静けさである。

それでも、一關大將に、密かに伴はれて来た、總理大臣始め、各大臣連は、塵外の淨地に居かれて、殆んど、生來始めて體驗する、森嚴な靈氣に打たれてゐる、神事に従ふ身とは言ひ乍ら、獨り心得貌に斡旋する、一關大將の様子を訝かりつゝ、將軍より一枚つゝ手渡された、此會より去る一月の末、發表された神詔を手にして、遙か奥深き神殿を、闚み覗つゝ、柔順なく列座して、神憑り神薙の、準備さるゝのを待つて居るのである。

神憑りの席上に、國務大臣の參列——時代錯誤乎、靈的向上乎、何んと、興味の深い、舞臺面ではあるまいか。

神憑り——神詔——、聞いたことの有る様な、見たことの有る様な、而も誰人もが、經驗したことの無い事實である。

昨日來、混亂を極めある、大臣連の、半ばは好奇心と、半ばは恐怖心との、交錯せる心理状態に、陥つてゐるのも、無理からぬことである。

讀者の爲め、神憑りに就き、文献外の事共を、少しく述べしめよ。

神憑りとは、特種の靈能を有する人に、神靈が憑依して、一時、其人の心意を喪失せしめ、神意により、特に神の選べる人に、言依しを爲し、或は第三者の質問に應じて、神之に告示を爲す、一種の神道の靈術である。

此法は、我が古典には、歸神とも、神託とも、また沙庭とも稱へられてあるが、沙庭なる名稱は、昔へは此法を修する時、地の淨き所を撰び、清砂を撒き、眞菰を敷き、其上にて、神招人（審神者とも云ふ）、神の憑依する人、即ち神傳人（神主とも云ふ）、奏樂人等（琴或は笙篳等を奏する人）打揃ふて、一定の法式を修し、神靈の降瀆を請ひ、告言を受けたものであるから、此名稱の起つたものである。

此神術は、遠く端を神代に發して居るが、具體的に、史上に表はれしものは、仲哀天皇の皇后、氣長足姫尊、即ち神功皇后の三韓征伐に於ける、神詔が、最も顯著である。

後世に至りては、古法は全く廢れ、種々亂雜極まる型となり、隨て其憑依する靈は、極めて低級なる眷屬共か、然なければ、殆んど妖魅邪靈である、故に其告事の下劣なるは、推して知るべきで、識者の爲めに排斥了されし所以も亦た茲にある。

高天原に坐す、大神等の神靈は、其神招人、其神傳人共に、高き神の靈統を享けて生れたる者等が、相會し嚴かなる修法の席にのみ、降憑し給ふべきもので、此資格を具へざる者等の招請には、絶対に應じ給ふべきものでない、是れは最も嚴格なる神律の存する所以の者である。

此團體に於て修する神憑こそは、人間の發意に因りて粉まれるものでなく、威な神意に本き起つたものである、故に世間在來のものとは、根本的に趣を異にして居る、

其理由は先づ、大神より在來の名稱を悉く排し、審神者を神招人、神主を神傳者と正し給ひ、大神の外は、神許なくして、漫りに他の靈を招請することを嚴禁されてある。

且つ此團體に於ける、神招人、神傳人兩人は、畏くも、氣長足姫尊の靈統を稟けて生れ、幼より非常なる、神の試鍊を経たる、奇しき運命の下に生立ち、近年漸く其機運到りて、本州の南北兩端に生れし人々が、奇しき機縁に因りて、相會して一體の如くになり、恐多くも、皇大御神の大神詔を拜受して、斯の會を起し、神人對話の仲介者となり、爰に始めて、大神業宣布に従事して居るものである。

故に其修法の如きも、悉く此道の主宰神、天珍乃女大神（古典に、天宇受賣命とあるは訛傳なり）より、神界の祕立を發して、授け賜はりしものであるから、皆古來會て他に絶対に傳はらざる、超越した神術である。

讀者中、若し從來世間に行はれてゐる、雜多な類似の業を見て、これと同一視せば、それこそ、天淵月鼈の譬へも、形容詞とならぬ、誤斷に陥るであらう。

不安の念と、閣員の所在が判つた、悦びとに、顛倒せん計りの體を、悍馬に托して、馳せ付けた參謀總長は、夢想だもせしことのない、靜肅壯嚴なる光景に、驚き呆れて、殆んど喪神せし如く、一同への敬禮をも忘れ、躓き乍ら、陸相の傍らに座り込んだ。一關將軍は、逸早く側に来て、肩を軽く打ち乍ら。

『さア愈々君方の、大活動すべき時が来たよ、まア神の御告げを能くお聽なさい。』參謀總長は、何が何やら分らずに、茫乎きんごんとして、狐惑こつごまれた様な貌かたちで、片唾を嚙む。斯くて嚴肅なる、神憑の神筵は開かれ、幽遠古雅にして、神語朗かな、大神詔は下された、一同は靜肅にして、耳を澄して聽いて居たが、更に意味が解からずに、唯神威に打たれて、平伏するのみ、無我夢中と言ふ形容詞が、此場合には、最も適切であるらしい。

畢つて一同は、別室に退がり、漸く我に反つて、説明を待つのである、神詔を具さ

に、解釋説明すべく、威風を具ふる神司長は、一關將軍に伴はれて出て来た、一同の視線は、期せずして、一齊に其人に注ぐ。

總理大臣は、身分柄會釋し乍ら。

『いや誠に、御苦勞を煩はしました、さて只今の神告げてありますが、先生が解釋の上、吾等の解かる、平易な語を以て、御説明が願はれますまいか。』

『私も、其積りであります、筆記原文は、一應朗讀致しまするが、解釋して、神意を御傳へ致しませう。』

『恐れ多い話じやが、俺も半分より解りませぬわ。』と、正直な老將軍は、一禮した。

其神告こそは、帝國の安危の岐るゝ所、否、世界人類の頭上に係る大事、一同は、異常の緊張を呈して居る。

神司長は、咳一咳して、顔を上げた。

▼抑も天體の怪象は、天地の定軌に、逆變を生したものである。推理推論を以て、測り知ることの出来ない、大神業なので、其れは、生物と言はず、無生物と言はず、愈變態な、獨自運動を已めさせて、唯一中心の下に聯合運動を起さしめ、眞の能動を發揮して、眞善美の境に到るべき、軌道に入り初めた、即ち、宇宙統一の端緒を發したので、決して壊滅ではない、創造、否、大革新なのであるから、悲むべき現象ではない。

天上に在つては、未だ人心に影だも映さなかつた、至高の大神が中心と爲つての、統一運動、地上に在つては、惟一系の神統民族が、中心と爲つて、世界人類の統一平和を圖る、大運動で、現在の有様は、神に遠かり、道を亂したる人類が、將に神に還るべき、大試鍊、否、大禊である。

天象は、地球の自轉が、停止したのではなく、太陽が、黄道の左旋運動を、開始した爲めに、晝夜の別が無くなつたのである、是れは此圈内が、獨立運動を已めて、

未現の新世界に、突進爲しつゝある、聯合運動である。

明日よりは中空の、液狀空氣が稀薄され、漸次氣温が、適度に下降し、隨て電波の流動も緩和され、電力に因る、地上の交通機關は、常態に復するであらう。

國家の首班に立つ、當路者は、國民個々を、教化善導する前に、國本社稷を覆さむとする、窮迫の大事に處せよ、舉國一教、人力の最善を竭せ、斯くて、神手を添えむ。

今や天地の怪象に、國民惑亂爲す間に、彼れ東の對岸の、富力を恃む、兇暴國は、此際坐して、世界の滅亡を待つべきでない、多年吾等の伸力を阻止する、怨敵日本國を亡ぼして、俱に倒れむと、全國民舉つて、著々戦備を整へつゝある、驚愕すべき大凶報は、是れより續々到るべし、郷等今より全力を軍事に注ぎ、陸軍には非常動員令を發し、常備部隊は、××地點と、××地點との二ヶ所に集中し、××港より、出港の準備を急げ、海軍は、各艦隊位置の儘にて、航行並に、軍事動作を息め、

急促に、戦時出動準備を整へ、命令を待てと、令せしめよ。

内閣を始め、國務樞要の諸機關、通信の樞要機關、軍機發動機關は、擧つて、皇室を擁護し、大森を甲斐國、甲府の郷を幾何も離れぬ、山梨の郡、巨摩の郡との境を爲す、×××地點に遷せ、既に神手を以て、民心を和らげ、騷擾は止めある、速かに身を提して、各自其職分に奮勵せよ。▲

斯く神詔の概要を、極めて平易に、適切に演述せる、神司長は、一碗の冷茶に、喉を潤はして、肅かに一同の顔を見廻した。

日頃、閣議の席上にて、理屈を捏ね回す、法相も、一語だに發し得ない、何事も批評的に、自家の意見を、一通り述べなければ氣の濟まぬ、總理大臣も、今は心服せし態度を以て。

『能く解りました、一々驚歎敬服の外ありません。到底吾々の、私議すべきことではありません、神明の加護と、陛下の稜威とによりて、有終の美を濟すべく、不肖、粉

骨致すことを誓ひます、今後共、君國の爲めに、何卒特別の御力添を、更め、惘願致します。』

斯く述べて、一禮し乍ら、各大臣を顧み。

『諸君に於ても、異議はありますまい。』

一同は、異議なき旨を述べれば。

不遜な態度で聽いてゐた、參謀總長まで、無言の儘で一禮した。

一關大將は、満足と感激との、高潮に達して、感泣し乍ら、獨り頻りと頷いて居る。恚うなつては、寸時も安閑としては居られないと、諸般の打合せは、更めて爲すことに口約して、一同は辭去する。

折柄、玄關先に来て、副官と、頻りに押問答を爲し居る、洋服男は、御用新聞の記者らしい、商賣柄とは言ひ乍ら、如何にして、此所を嗅ぎ當て、駈け付けたのであらう乎。

首相の大演説、日獨同盟成る

太陽こそ見えないが、今日は非常に気温が下つて、爽かな風が吹渡り、民衆は何れも、気分の良い、晴やかな顔をして、續々と、日比谷の音楽堂を指して詰め掛ける。暴動化するまでに、あれ程騒擾を極めた民衆が、假令、新聞號外で、行衛不明の内閣員が歸つて来て、神命を承けて、刻下の危機を拯ふべき新方針を、今日、總理大臣が、一般民衆に演説すると言ふことを、聞いたにした所で、斯う迄、俄かに鎮靜するとは、眞に不審議である。

今日の群集こそは、此公園開設以來の、多數の集合と謂つて可からう、男女の別なく、幼い者は、群集の頭上を駆け歩ける程な、状況である、應て定刻となるや、鼻眼鏡裕かに、白髯長軀の首相は、閣僚を随へて、悠然と出場した、幾萬とも數へ切れないう程の群集は、一齊に拍手して、大歡聲を揚げた。

少時、歡呼の鎮まるを待つて、首相は、大要左の如き演説をした。

▼茲に、突然涌き起つた天體の變象と、人心の變化とによりて、國家は方に危険に陥つてあつた、然しこれは、獨り我が帝國のみにあらずして、世界各國の等しく被りたる状態である、是れは決して、世界の滅亡の前兆ではなかつた。

今や、世界の人類が、正しき神を忘れ、誠の道を失ひあるが爲めに、世界人類を、大改善爲さんがため、神の行はれた大革正なのである、故に之を以て、直ちに我が帝國の、危機とのみは言ふことが出来ない、斯る次第であるから、國民一同、今より大反省を爲し、總ての心得違ひを神に謝して、神命を遵奉して、正しき道に仕ふべきことを誓ひ、之を祈つたならば、必ず國家は安泰に赴くのである、然るに、如何にしても逃るゝことの出来ない、我が帝國の大危機が、刻々迫りつゝある、それは多年、我が光輝ある皇國に、大國辱を加へし、兇暴なる彼れ米國が、一舉して我が帝國を蹂躪せんと、着々大戰備を整へ、西來せんとしつゝある、今や我が帝國國民

は、亞米利加と戦つて、之に撻たすんば、金甌無缺の我が帝國は、滅亡するより外に道がない、否、我が帝國のみの滅亡ではない、世界平和の、永遠的破壊、世界の滅亡をも來すべき惧れがある、刻下の帝國は、實に世界人類、永遠の平和を得んが爲め、是非共米國と戦はねばならぬ、我が當局者は、今より内外樞要の國事、悉く神命神護を蒙り、全力を盡して、最終の勝利を、贏ち得べきことを確信する、全國民に於ても、各自奮勵努力以て、帝國が神より命せられし、大任務を貫徹すべく、献身せんことを、宣誓して貰いたい。▲

さしも大群集は、風なき森林の如く、一語だに發せず聽いて居たが、首相が演説を畢るや、囂々と一齊に聲を揚げて、神と陛下とに、誓ふべき旨を叫んだ。

折柄、何人の準備ぞ、一隅より、君が代の奏樂が起つた、極度の感激と、敵愾心に興奮せる幾萬の民衆は、忽ち奏樂に和して、君が代を合唱し乍ら、退場せんとする刹那、××新聞社旗を携へたる一記者が、メカホンを手にして、演壇の前にと立つた、

彼の壯漢は、メカホンを口に當て、一大快報を諸君に傳へると叫んだ。

▼今や空中電波は舊に復し、通信機關回復に向ひました、本社の無線電信室が、復舊の第一信として接受した、伯林通信によれば、獨逸政府と、日本大使とが、數月前より秘密に交渉爲しゐたりし、日獨攻守同盟が、確實に成立した旨を報じて來ました、是れは極東平和の爲めの、一大光明でありますから、諸君と共に、萬歳を三唱致しませう。▲

斯る報導によつて、群集は彌が上にも熱狂し、萬歳々々を叫んだ聲は、耳を聳せん計りである。

放送無電の弊害

今迄は、無電放送装置の發明を喜び、各家庭は、居乍らにして名曲を聽き、或は名優の舞臺に演ずる、臺詞せりふを聽いて娛み、各新聞社は、外國通信を競ふて、各讀者の家

庭に送り、其敏速と通報の多きを、誇りとしたものであつた、斯ういふ至便な設備は、何麼どんなにか社會を益し、向上せしめたかといふに、それは歐米各國でも、我國に於ても、結果は正反對であつた、何故なぜなれば、簡便な娯樂は、誰人もの、刹那的歡樂心を唆り、又各自の生活に、直接利害を來さざる、内外の事象を、間斷なく通報される民衆は、常に落付いて、種々の研究をしたり、又考慮を運らすと云ふことが無くなつて、諸事萬端・附和雷同的態度となり、凡てに野次馬的氣分が、漲つて居つた、然るに、かの電波の變化よりして、内外の通信機關が、杜絶した時には、國家政治の運用上には、非常なる不利な點もあつたが、其間は官民共に、珍らしい程、努力心を發揮すると與に、國內と言はず、海外と言はず、色々な出來事が、相互に通信せられぬ爲め、何事も知らずに、各自こゝろの信じる所を、固く執つて進んだものである、それが又、常態に反つて、通信が回復したのは、果して善い事やら、悪い事やら分らない。

學究の大發明に係る秘密圖盜まる

最も混雜することゝ、騒々しいことより外に、誇りとするものゝない、帝都第一の目抜き十字街を、斜ヒキかいに瞰みおろ下して建てる、宏壯な五層樓の新聞社があつた、また、社外出動の探訪記者は戻らず、第一版の校正が、出來た計りの編輯室は、一連り若い記者等の、雑話と笑聲とに充たされてゐる、折柄、鬨を排して、一人の外出記者が歸つて來た。

『やア酷い烟だなア、君等は顔も能く分らない程の、煙草の烟の中で、能く相變らず、與太の競争を行つて居られたものだなア。』

と、言ひつゝ、中央の椅子に腰を卸し、靴より要點筆記を出し乍ら。

『最新にして、而も特種子——大珍事の封切り、さア聴たければ、謹聽々々。』

一同は、異口同音に。

『何麼だ、何麼だ。』

『そら、航空界一方の重鎮、米國に負けない、ギヤソリジも、電氣も使用はない、エンジンの發明に夢中になつてゐた、例の田山博士さ、奴さんの娘が、昨夜博士の苦心を極めて、やつと完成に近い、例の發明設計圖——詳密の圖面をさ、それを盗み出して逃亡をきめた、それを今朝發見した騒ぎだ、發見した博士は悶絶するさ、密訴によつて警視廳の搜索係は、大活動を始めるさ、いやもう田山家は、大混亂状態に陥つたといふ場面へ、乃公が飄乎往つたもんだ。』

『な、何……、何……、其逃げたのは、薰子嬢か……』

と、血相變へて詰寄つたのは、常に社内で、ベリカンと、綽名を付けてゐる、若い記者。

葉捲を銜へた儘、にや……と笑ひ乍ら、無言で聽いてゐた、米利堅容姿の瀟洒な、中年記者は。

『ふん、有りそふなことだ、乃公には大抵、筋書きが判るねえ、多分は、乃公の睨み通りだらう、それで今以て行衛不明か……』

『何が今以てだ、たつた今の出來事じゃあないか。』

『靱山君、男の情人がありますか……』

一隅からは、頓狂な聲で。

『有りますよ。』

編輯室内は、殆んど、蛙合戦の様に喧噪がしく、各自職分をも忘れて、騒いでゐる、椅子から轟乎と起つた、社會部長は、年配顔を攫めて。

『諸君は、ちと靜肅に出來ないか、靱山君、事件の要項は、採録して來ました歟、偵査部に掛けます歟、又君が單獨に行ります歟。』

鶴の一聲と言ふ程の權威もないが、冷やかな商賣聲で、一同は我れに反り、遽かに洋筆を手にする者、室外に駈け出す者、編輯室は急に靜かになつた。

飛行機研究が、自分の生命ごと、常に言ふて居る程の、田山理學博士は、大學教授の職も罷め、多年續けてゐた、音波學の研究も棄て、立派な研究室まで建て、航空學の研究に熱中し、機體構造に於ても、エンジンに於ける瓦斯の壓縮装置に於ても、新發見を有する權威者である、それが、今年の四月、米國で、ギャソリンも、マグネツト装置も要らない、併も突風に逆つて航空が出来る、輕飛行機が、完全に發明されたといふ、秘密通信を手にしてからは、我が國に於ても、それに優れる飛行機を造らなければ、國防を完全にする事が、出来ないと思し、それ以來といふものは、日夜寢食を忘れて、研究に没頭してゐたのである。

博士が最も愛する、四女の薫子嬢は、常に父博士の身邊を離れぬ程にして、殆んど、助手の役まで勤めてゐたのだ、其最も信する嬢が、生命にも換へ難き、幾んど完成し

た發明秘密圖を、竊み出して逃走したのも、博士の悶死するのは、無理からぬことである。

風には心がない、春の宵の巷を、微醺を帯びた、漫ろ歩きの人が、戦よ風に吹かれ
たならば、心地好しと言ふであらう、秋の夕暮に、舍りを急ぐ旅人が、野分けに逢は
ど、漫ろ哀愁を感じるものだ、吹く風は同じである、斯くまで異なる感じを與へるの
は、時と環境とに由ると言はねばならぬ。

社會の出來事が輕視され、或は重大視され、色々な象を現はして、各方面に波及す
るのも、恣^か慮^りした理屈からである。

大きな世界と云ふ獨樂が、回轉の最高調に達してゐる、其上に立てる日本の現在社
會は、何事にも乍ら顛倒し、或は妄動する程に、神經を鋭^くがらして居るのも、時と環

境とが齎らす現象と言はねばならぬ。

一學究の娘——新らしい思想を有てる、若き女性が、研究書類を持出して、一日や二日、出先きの判らぬと行ふことが、満都の人心を沸き立たせ、國家だの社會だのと、大形な言葉を以て、論評しなければならぬ程、國家の存立に、干渉した重大事であつたなら、社會が單なる青春者の、遊戯とのみ看ないのは、無理からぬことである。常に嚴格なる、田山博士も、愛嬢の好みには、除外例であつた。

舞踏は如斯風紀を糜爛す

國華ホテルの電燈、晝よりも明るく、血汐を沸き立たしむる様な、樂の奏さるゝ、華やかな舞踏場は、現代のいはゆる、紳士淑女と稱ふる輩に取りては、其有てるあらゆる慾望を、満足さする、地上の樂園でなあらう。

好める道として、この恐ろしくも爛れた、樂園の一人となつた薰子嬢は、其熾烈なる

愛欲が禍因となつて、愚かにも、巧言瀟洒なる、碧眼に魅せらる身と爲つたのだ。

一夜亂舞に疲れ、獨り露臺に出て、憩ふ所に、慕ひ寄つて來た、魔人——彼れは笑を含める儘、一語も發せず、嬢の左手の無名指を固く握つた、薰子嬢は、暫く恍惚として己れを忘れたのだ、此時碧眼の若紳士は、嬢の耳許に口を當て、繰返し繰返し、靜かに囁いた、暗示——暗示——恐ろしき暗示——。

蜜の如き甘き囁きすら、危険は伴ふものを、果して、恐ろしい暗示は、國家の樞機を動搖せしむる程の、重大事を惹き起した。

交靈術乎、非ず、麻醉藥乎——、死の如き深き眠りより、段々醒めて來た薰子嬢は、まだ意識が判明せず、見馴れぬ室の、怪げな寢臺に、横はれることを氣付かない、斯うして幾時までも、氣付かずに居るだらうか、氣付いて自分の身邊を顧みた時——、驚愕の爲めに、心臓が破裂しなかつたならば、女丈夫でなければ、恐らく精神異狀者であらう。

佳人米魔の爪牙にかゝる

流水は落花を誘ひ、落花亦た流水に投ず、今は斯る機微を、徒らに批判するには、餘りに應はしからず時である。

巫山の夢より醒めた、誰やらと異なる、薫子嬢の覺め方は、既に遅いと言はねばならぬ、理性の眼覺めた女性には、悔悟にあらで、憤怒の心が勃發した嬢は、一絲だも纏はざる、あられもなき身をも忘れて、足下に絡はれる、薄き毛布を以て、半身を被ひ起ち上つた、ふと傍の卓子に眼を注げば、殊更にか、不注意にか、書類數部を重ねた上に、小型の短銃が載せてある、半ば狂へる嬢は、我が罪を責めて、自殺せよと、父上が齎らし給ひしものか、とさへ思つた、無意識に嬢の左手は、短銃を握り締めた。書類の表面の盟約書とある、日本文字が、嬢の眼に映つた瞬間、意識は俄かに鮮明となつた、急いで一枚を披くれば、邦文英文取交せて記入された、一種の連判狀であ

る、直ぐと次の冊子は披かれた、書面を凝視せる嬢の顔面は、灰色に化し、切れの脩い兩眼は、引釣りて充血し、口唇は痙攣に顫ひ、何事の誌しあるにや、驚きの餘り、左手の短銃を床上に、瓦落りと落した、兩の乳を抱へて、少時電燈を睜めて居た、薫子嬢の顔には、決死の色が浮んだ、忽ち落ち散れる手巾を拾つて、かの恐ろしき書類を包み、睨と抱へ、短銃を右手に握り、入口に進んだ、外から鍵の掛りあることを曉つた嬢は、屹度眼を窓に注ぐよと見る間に、身を蹴して馳せ寄つた。

街路に面せる窓の戸に、鍵の無いとは何事ぞ、妖魔の術策乎、天祐乎、書類と短銃とを兩手に持てる、半裸體の嬢は、窓の椽に片足を掛くるが早いか、脱兎の如く身を躍らして、街路目掛けて飛び下つた。

薫子嬢の身は、果して無事であらう乎。

米探の陰謀、邦人の大虐殺

通信機關の回復後は、日夜各國の政變、人心の變化、其他、非常なる出來事のみを報じ來る爲め、各新聞社は、號外の發行にのみ逐はれ、殆んど、本紙の發刊はそつち除けの様である。

それ故に市民は、日々街路を駆け廻る號外屋を、厭煩がつて顧みる者としては無くなつた。

其珍らしからの號外が、今日こそは、何人も見ないでゐることの出來ない、大椿事を掲載して、全市民をして、殆んど、驚愕と恐怖との絶頂に至らしめた。

其記事の要は、下の如きものである。

◆今朝警視廳の交通取締が、サイドカーを飛ばして、米國大使館脇に差掛かれる折柄、三階の窓より、毛布に包まれる裸體美人が、投げ墜された、吃驚した巡查は、カーを止めて、氣絶せる美人を昇き乗せ、疾走して本廳の醫務室に擔き込み、手當

を加へて漸く蘇生せしめたるに、意外にも、かの社會に大波紋を起したる、行衛不明なりし、田山博士の令嬢であつた、例の秘密設計圖は既に失ひ居たるも、手には恐るべき、大陰謀の秘密書類と、短銃とを握つてゐた、其秘密書類こそは、彼の交際場裡の名物男、米國大使館の書記官××××が、首腦と爲りて、不逞鮮人、支那人、日本の××××不良團員と、血判誓盟の上、帝都の十ヶ所の樞要なる個所を、爆破せんとする大陰謀の企畫成り、愈々××日の夜を以て、一齊に實行すべき、順序の打合せ書を携帯せしものにして、此大陰謀の發見さるゝや、警視廳は、戒嚴司令部と協力の上、時を移さず非常召集を行ひ、大活動を開始したれば、間もなく兇徒は逮捕され、帝國首都の大危機は、疑ひもなく防止されん。

其筋の檢舉方針上、田山家の令嬢に關する詳報は、禁止されたるにより、遺憾乍ら掲載の自由を有せず。

◆佛京巴里、通信員よりの無線電信によれば、××日、米國紐育の郊外、並に加州

サクラメントに於て、十數萬の在留邦人が、大虐殺されたる模様なり、其動機は、今回全米國民が行ひたる、日本に開戦の大示威運動に對し、日本人が對抗的示威運動を起し、爰に端無くも双方の行列團が、途上に於て大衝突の結果、彼れ米人特有の兇暴性を發揮し、此に至れるもの、如し、更に詳報の到るを待つて、事實の真相を明かにせん。

此事に關して、霞ヶ關に於ては、未ば公報到らずと、秘密に附し居るも、已に御前會議開催中なれば、大詔煥發は、數日を出でざるべし、隱忍持久の我が帝國も、愈世界人道の大敵を膺ち懲すべく、正義の劍を抜かざるべからず、果して我が當局は、是れに對する戰備調ひある乎、否乎。

御前會議二十五分時間にて決す

建國未曾有の、御前會議は、異例を以て、樞密院全員、内閣員は勿論のこと、上下

兩院正副議長、在野政黨の各首領、海陸參謀部長等、參列の大會議にも拘はらず、僅かに、二十五分間にて決議を見たのである。

是は畏くも、允文允武に坐はず、崇祖の御心厚き、殿下には、過日來、一關老將軍と、内閣總理大臣とより、神命の嚴著なることを内奏して、恐多くも、總て、明治天皇御神靈の詔り給ふ、神勅を奉じて、政局を收め、國防軍事の大方針を進むることの、御許を受けて居たので、今回の御前會議に於ても、内閣總理大臣が、職責上、御前に於て、參列の各皇族殿下、並に閣僚以外の各員に對し。

▼本大臣は、睿武に坐します、殿下より允許を蒙り、建國以來、未曾有の大國難は、一に神命を畏みて、政局を進むるは勿論の事、今日公報の到れる、大國辱に處して、皇威を振ふべき國策は、咸く神命の隨に、微臣、畏くも、神勅を實行する決心に就き、御前參列の貴顯、並に各員の御了解を請ふ。▲

と、述べたに過ぎない、斯くて、殿下より、畏くも、悲痛にして、優渥なる御説が

あつて、各員は何れも、無言ではあるが、眉宇の間に、一大決心を示して、御前を下したのである、此間實に二十四分。

宣戦の大詔煥發

現時世界の、無線電信界に冠絶した、我が遞信省式、併立放射杆の新たに建造された、中央無線電信局内は、更に五十臺の發信装置を増設して、非番召集の上、戦場の如き大活動を開始した、而も局の周圍は、武装せる憲兵と、護衛兵とによりて、嚴重に護衛されてある、それは昨夜煥發された、米國に對する、宣戦の大詔を、各地方官廳に送信せんが爲めである。

滿都の民衆は、官報號外によりて、宣戦の大詔を手にしたのであつた。



吁、大正×年×月××日、午前十時三十分、國民怨恨の標的たる、人道の大敵。米國に對する、宣戦の大詔は煥發されたのである、大詔を手にした民衆は、一時熱狂した、大歡喜した、幾百萬の民衆が、一齊に發した叫び聲は、一時異様の響きを傳へて、帝都の中空を震動せしめたが、少時にして忽ち靜かになつた、市街の狀況は、肅然として少しも平時に變らない、強いて異なる點を尋ねたなら、それは曳きも切らず、宮城前に遙拜する者と、全市各神社に參拜する者の、多數あることである。

宣 戰 □ 書

朕、五百都御統の天つ日嗣を稟けてより、茲に十有四年、
畏くも、皇御孫命の大稜威を、皇考の遺徳とを以て、外

國に盟ふに、禮讓を以てし。内は治を圖るに仁慈を以てし。不逮ぬ躬を以て、恒に國威を内外に輝かし。蒼生賑ひ、軍人等の猛きは、偏に神惠の渥きにそよるご信し奉る。朕は日に夜に蒼生の、神を尊み、國法に遵ひ。常に徒らに外國風にのみ習はて、正道をたとり、各々分を守りて。恪勤爲すをこそ、希ふご久し。然れど、司等も、大勢の運るに逆行ご應はて、風俗の頽れ行く態を歎はし。斯れは往年は、神、彼方の大陸に、大戦を湧き起たせ給ひしも。朕か國は、正義の爲めに、與しぬ。又前年には、皇居なす、都の大地を震はし、朕か撓める心を戒

めらる。威是れ、皇考の神靈の、甚く威振らせ給ふにそある。今度こそは、建國以來、前例莫き、大柱雲そ皇國の光を蔽ふ。これそ、東の彼方に陸地占め、非事重ね、暴威を振ひて、國勢を張り、驕傲邪曲嵩みて、五月蠅起つ、彼れ、合衆國の亞米利加を、今、皇大神の直系の統治す、朕か國を蔑視し辱め、朕か蒼生なる汝等か同胞を、虐げ殺ること十餘萬。是れ上は歴世の遺烈を瀆し、下汝等の倚頼ふ期待をそ壞ちたるなれ。朕、省みて甚く躬を窘めて、罪を天神に謝す。朕、神命を遵し奉りて、雄叫ひ揚げ、天太鉾拔き放ち、彼れ暴醜者一太刀に屠らむ。

敵國の無敵飛機大舉襲來す

天體が怪象を示し、其の爲めに、世界の通信機關が攪亂されて、我が國の軍事通信も、不能に陥つた時、二百臺に達する程の、飛行機大部隊が、飛行禁止に係る、我が國防線の上空を、南溟に向つて飛び去つたと云ふことは、未だ讀者の記憶に新たなる筈である。

今其の消息を少しく洩らして置かねばならぬ、あれこそは、我が田山理學博士の、苦勞の種となつた、米國の無敵飛行機隊である、それは機翼鈎線の、幾何的調節によつて、強風なれば、却つて浮揚力が自由となり、殊に、航空機の最も難問題たる、エンジンが、秘密發明に係る、壓搾空氣の作用によつて、瓦斯の發生を要せず、マグネツトの力を藉らず、幾んど理想的の物なのである、其れ故に、かの天體の異状も恐れずに、大遠征を企て、布哇島に數時間休憩して、通信の不能と、國內の混亂とに乘じ、

一隊は小笠原島を占領し、一隊は臺灣島を占領するといふ方針であつたのだ、それが天祐とも言ふべきか、怪光線の爲めに、上空より小笠原島が見えなかつたので、進路を過つて、全隊が本州の沿岸を掠めて、眞直ぐに臺灣を目掛けたのであつた。

國民が、能く天意に逆ふ様な事がなければ、間髪を容れない程の危機に臨んでは、忽ちに偉大なる神護のある、我が國體であるといふことを忘れてはならぬ。

二百餘臺の無敵飛行隊が、怪鳥の群集の様に、臺北臺南の上空に迫つて、將に猛烈な毒液の雨を降らさんとした刹那、奇蹟的な旋風が起つて、飛行隊は一瞬間に、支那大陸に吹き付けられ、杭州に一先つ着陸の止むなきに至つたのであつた。

幫間的支那官憲は、あらゆる便利と款待とを怠らなかつたことは、言ふまでも無いことである。

軍事通信員より、參謀本部に來た情報に據ると、月餘を經過した今日、未だ杭州に留まつて、營々何事かの準備に、急がしい模様である、東亞の天の風雲一度び亂れ

んが、彼の怪鳥は、必ず活動を起すに違ひない、實に油斷のならぬことである。

歐洲各地から、不穩な通信は、頻々として絶へず、而も神命まで蒙りある我が内閣は、今日まで遷都の奏上もせず、依然として、軍事樞要機關も、危険極まる、東京に置く有様なので、國民の心あるものは、一齊に國防と戦備とに、疑懼を起して來た、果して我が當局は、それ程無能なのであらう乎。

請ふ杞憂を息めよ、是れは聊か機密を洩らすの恐れはあるが、國民の士氣を維持する必要上、極めて秘密に……、戦備の一端を洩すことにしやう。

我が戦備の大機密公開

米國に戦を宣した、絶東の島帝國は、全國上下響つて、開關以來今度の様に、眞劍な、最後の覺悟をしたことは無い、それなのに、國民は皆な靜かに落付いて、立場々々の本分を守つて居る、然るに、幾回も經て來た、大戦争の何れにも、比較すること

の出來ない、白熱化した程の。敵愾心と奉公の念とに、充たされてゐるのに、帝都を始め、各地方に至る迄、其表面から觀た所では、常よりも靜肅な位である、それも其等だ、第一召集令の執行からして、前例のない、新機軸を示したのだから——、宣戦の大詔煥發一週間前、既に三個軍團の大部隊が、西方の某港の附近に集中されて、命令一下、咄嗟の間に、大活動に移ることの出來る、準備の調つて居たことを、其關係者以外には、國民の誰もが知らなかつたのだ、それは、現役屯營外の在郷軍人各個には、普通郵便の體裁による信書を以て、何日の何時から、何日の何時までに至る、一週間に於て、家事身邊の整理を爲し、某地點まで、通常服裝の儘、集合せよとの召集命令であつたのだ。

日米戦争は、原因も經過も、今更事新らしく述ぶる必要は無からう。二十年來、日本人の期したる既定事の實現である、世界の視聽も亦其の如く、如何に溫順なる君子國の日本も、常に人道を無視して、國勢振張の爲めに、斷へず東洋の平和を脅威する、

米國に對しては、必ず戰鬪旗を艦橋マストの上に掲ぐるであらうと、觀てゐたのだ、殊に最近一年以來の、日本の爲めに執つた内外の措置は、如何に國民の覺悟を固めさせたか知れない、それ故に、召集令を受けた家には、老ひたる親も、若き妻も、幼き兒も、或は雇主も、友人も、皆覺悟の前の事、出來得る限り、本人を勵まし、便宜を興へて、極めて秘密に、靜かに、敏速に、本人を集合地點に向はしめたのだ、是れ丈でも、今迄の陸軍としては、近頃珍らしい大出來である。

一方航空本部では、秩父山中の某村落に、日夜兼行で、急速に、飛行機製作工場を建設した、此所でも、宣戰發表の日迄には、日本が今までに有した、陸海軍飛行機の數の、三倍以上に達してゐた、猶ほ續々製造されつゝある。

次は全國の電力供給所に對つて、政府當局は、燈火用電流の半減供給を命令した、即ち十燈を點せし家は、五燈に減らし、五燈の家は三燈に減らし、その上、終夜送電を禁じた、是れは急速なる、兵器製作に要する動力電流を、豊富ならしめんが爲めの

みではない、各地の山嶺、或は海岸に、新線を布設して、銳意工事を督勵して居る、此巨大な電流は、他日果して大効果を擧げて、國防の一部を全うすることにならうとは、誰もが、相像しなかつた。

全国各地の要塞や、海堡の現状は、國民誰もが、知りたい事柄ではあるが、是れは戰略上、何麼しても機密を、今公開することは叶はない。

飛行機狙撃砲は、世界に冠絶したものが、既に發明されてあることは、一般周知の事實である。

次に知らして、安心させて置きたいのは、如何なる毒瓦斯をも、完全に防止消化せしむることの出来る、化學的マスクの發明されたこと、今一つは、一回の携帶量で、五日間の營養を、十分に保つことが出来る、野戰糧食が發明されたといふことは、我が軍の非常な強みである。

海軍の方は、是れ亦、現在の設備としては、より以上、最善の手段は無いといふ程

の幾んど遺憾なき、戦備配置が調つてゐる、然れども、是れも残念乍ら、其一端をも、公開することを許されない。

變象の爲め一般人の獨自心減耗す

天體中に於て、廢星と想はれてゐた月も、亦た我等の住める此地球も、何麼して廢星であらうか、或は未知なる、次の世界に進む道程だと言ふものもあるが……、畢竟するに、皆科學的實驗とは言ふものゝ、學者の想像推斷説に過ぎないのである。

去る二月五日以來の變象も、僅かに、一小地球上の人類が、狭い視界に於ける、經驗のない、認識觸感を以て、果して天體の異狀と、言ふことが出来るであらう乎、際涯する所を知らざり、大宇宙の事は、何麼で經驗の淺い、認識の錯誤し易い、鈍觸感な、人類の批判を容さうぞ、進化を知るのも、統一を知るのも、創造に參畫せる神でなければ、解かることが出来ない筈である。

月は既に視界を去り、北極星は吾々の頭上に輝き、太陽は黃道回轉を起して、晝夜の別が無くなつたではないか、電子の游離が濃密となり、電波の作用が以前に倍して、回復すると同時に、相對引力現象は、何うして變化したのか、地上一切の物體が、自働回轉を起したのも、一時の奇現象として、忘れ去られた。

氣温は常に、華氏の九十度を示して、凡らゆる樹木植物が、悉く盛夏の様に蕃茂してゐるのだ、斯る状態なのに、氣壓は非常に上て、常に空氣が稀薄になつてゐる爲めに、人畜總てが、疲勞を來し易いのである。

宇宙の諸因に沒交渉であつてはならぬ、人類の精神作用にも、大變化を來したのだ、疲勞を來し易きが爲め、事に當りては、非常な努力心を發揮するが、一面には、單獨行動とも謂ふべき、獨自運動が出来なくなつたといふ、奇現象を示すに至つた、其れ故に、我國に限らず、外國とは言はず、國民に一致協力の心は生じて來たが、一の卓越せる思想家、或は爲政者が出て、指導命令の位地に立てば、其唱道する所の正邪を

問はずに、民衆は乍ち追隨運動を起すといふ、面白い状態となつた。

九六

伊佛蹶起して皇國に與みず

在外使臣等の手によつて、國際辭令を以て、締盟各國の政府に對し、我が國が、米國に戦いを宣したる旨を通告するや、各條約國に於ては、何れも當の日本國よりも、熱狂的騒ぎを惹き起した、中にも、同盟國の獨逸伯林に於ては、大學生と軍隊と、市民とにて成れる、大示威行列が、亞米利加を倒せ、亞米利加を倒せと叫びつゝ、市街を練り歩き、到る所に於て、在留米人に暴行を加へ、檢東者を出す程の、大騷擾を起したのである、殊に頻々として到る、外電情報によれば、近時國際場裡に、沈黙を續けし伊太利に於て、曩きに宰相の印綬までも帯びた、今は不遇にある、憂國熱血の、ムリニイは、猛然蹶起して、護國青年黨を率ひ、伊太利帝國は、此際正義の日本に與みして、世界人道の大敵たる、亞米利加を討たざるべからずと、全國に大運動を開始

した、爲めに、伊太利全國民を擧げて、常に主義の相容れざりし者迄が、協力一致して、國論は沸騰點に達する迄に至つた、それかあらぬか、伊太利首相は、只一人の秘書官を伴ひしのみにて急遽、佛國首相を巴里に訪問した、無量十時間に亘る、兩國首相の秘密會見の内容は、到底他人が窺ひ知る中もないが、忽ち佛國首相が公式を以て、亞米利加を除く、國際會議に參與權を有する、各國政府に對し、緊急會議を開催するに就き、至急代表者を出席せしめよと、促して來たのを看ても、彼の伊國首相の巴里訪問が、何事でありしか、略ぼ想像が付くではないか。

獨り冷靜なるは、英國である、然れども實は表面のみで、情報の齋らす所によれば、英米兩國外交官の往復は、頻繁を極め、殊に英國海軍省は、新たに聯合編成の大艦隊を、新嘉坡に向け急航せしめたるは、何物に備へんとすることを暗示するものであらう。

何事に就けても、東洋の大事に際して、怪しき振舞を爲すは、支那政府の傳統的陋

九七

習とは言ひ乍ら、此際、唇齒輔車の關係を持続して、同盟事に當らねばならぬ、彼れ支那が、何等國交斷絶にも至らない今日、突然、北京天津の在留日本人全部に對し、二十四時間内に、奉天迄退去せよと、違法の令を發したることである、而も天津では、暴動者の爲めに、多數の日本人が殺傷せられし模様なるも、支那官憲は、國際經營に係る、無線電信局を、残らず封鎖した爲めに、通信杜絶して、何等詳細を知る由もない。

噫々、今や皇國は、腹背に敵薄まる、果して日本は支那に對つても、宣戰を發して、交戰國に陥らねばならぬの歎。

十四ヶ國締盟して米國に戰を宣す

爰に、忽ち國民を歡喜せしむる、大吉報が、外務省によりて發表された、それは、伊太利政府の大活劇と、佛國首相の居中遊説とが功を奏し、英吉利と支那の二國を除

き、巴里會議に參與の、締盟十四ヶ國が、局外中立といふ様な姑息なる手段を探らず、一致團結して、悉く米國政府に對つて、宣戰を布告し、極東日本を極力援助するといふ、決議の公報である、殊に犬猿も音ならざる、獨佛の、積年の怨恨を一掃して、本に對し、化學軍需品の供給同盟を企畫したることである。

佛獨の縁を結んだ、月下氷人の功は、熱血伊太利乎、非ず、日米戰爭といふ、恐ろしい其名なのである。

在冥伊國名士の靈、著者に所見の

發表を請ひし、譯文

何故に、世界の視聽が、逆行的急變を來せしかば、吾曹思想家にあらず、一朝にして斷することが叶ふべき、循りては環る、是れが久悠に變らぬ、ローテーションであらう。

斯る自然の大勢は、今や、旋風の様な勢を以て、燎原の火を煽るが如き、歐州思想界の現状である。

大陸の尖端を海洋に占めて、火山脈上に立てる伊太利は、固より眞理を憧憬して、正義を愛好するの國民性である、其れが、大勢轉換の前驅を爲すは、當然の歸趨と謂はねばならぬ。

歐州大戰の結果を驗たる、佛蘭西は、夫の大亂の備は、カイザーが培かつたにせよ、英の狡獪が、爪牙を隠して、貪慾の絲を繰つり、かの如き大戰を捲起した眞相に眼醒めて以來、英獨が苟合して、佛國を壓迫し來ることは、火を賭るよりも瞭かであつた、故に佛は、英の主張する所は、常に之を妨げ、斯くて極力、獨の創夷を瘥さで、勢力の回轉に努めたものである。

然るに、常に卓絶せる國體を維持して、殆んど、世界大勢の推移に無關心なりし、極東の一小帝國日本が、東西兩半球の分水嶺と爲つて、正に、乾坤一擲の大骰子を投

げし、冒險的勇者と、歐州諸邦より、窃かに畏怖さるゝ獨逸が、兄弟の誓を爲したのである。

歐亞の天地は、將に大轉換を起さなければならぬではないか、之を表面より、正々堂々、道義を以て説き來れる者、即ち伊太利である。

機微を察するに敏なるは、才子の常、賢明なる佛國は、來るべき事相建設の大勢を曉つて、此に歐州政界の大勢を決せんか、強弩の末勢、魯縞を穿つ能はざる、老獪英國は、自然に萎縮すべきであると、推理を窮めたのであつた。

果然……果然、大小強弱十四の一大聯邦は、米に宣戰して、而も實際は、英を角逐場裡より除くといふ、面白い結果を得るのである。

今迄の歐州思想界は、之を二大潮流に分つことが出來た、一は無主放縱享樂主義、一は暴君專制統一主義である、前者は其遠因を、人種別、階級別より發した、混血兒の理想主義、後者の遠因は、彼の隱然大勢力を占むる、猶太の復讐主義であつた。

決河の水は、禹も亦た防ぐこと能はざるものである、此二大潮流が、杳として、歐州に影を潜めた。(了)

敵の飛行隊臺灣を占領す

臺灣本土間の、海底電線が、米國の潜航艇の爲めに、切斷されたと云ふことを、氣付いたのは、既に臺灣が確實に占領された、翌日と云ふのであるから、官民共に、如何に無線電信電話にのみ、信頼してゐたかと云ふことが判かる。

黄海の水平線上に、一叢の入道雲が湧き出たと見た間に、彼の杭州に潜んで居た怪鳥は、疾風の來ぬ間に、翼を列ねて、一氣に臺灣島の上空に現はれたのだ。

あらゆる慘忍なる、最新破壊器を搭載した、米軍飛行隊が、臺灣の要所々々を、瞬く間に襲撃爆破して、全土を完全に占領して了つたのが、僅かに二時間を要さなかつたのを見ても、如何に慘憺たる光景を現出したが、想像するに難からぬであらう。

臺灣の全生命を負ふ、基隆無線電信所が、第一回爆撃によりて、粉碎された爲め、ばつたり通信の止つた、別世界の出來事とはなつたのだ、本土の國民は、斯る事は夢にも知らず、布哇島占領の捷報が到るのを、拙け出る程、首を差し伸べて、今か今かと待つて居たのである。

精銳なる、二百餘機の米飛行隊が、杭州に潜んで、好機會を待ちつゝあることを知り乍ら、大本營の參謀部は、何故に斯くも無算々々と、第一步を過つたのであらうか、それは、神命の警戒を輕んじて、臺灣水道に、驅逐艦を配置せず、布哇占領策のみに急にして、殆んど、樞要なる全艦艇を擧げて、聯合艦隊を編成し、布哇島を指して、直進せしめた爲めであつた。

我が中國の飛行隊突然影を潜む

折柄大本營には、無言の嵐とも言ふべき、動搖狼狽の事情が起つて來た、それは、

無電室より參謀部に、一の奇怪なる報告を齎らしたが爲めである、他ではない中國に在る、某飛行隊の飛行機全部が、昨夜忽然として、行衛不明と爲つたと云ふ怪報である、最高戦略部より、何等機密な命令を受けたのでなくて、軍紀上最も重大とする所の、命令を待たざる、自由行動に出たものである。

無謀の舉乎、冒險乎、壯圖乎、將又た何ぞ期する所があるの乎、獨り北叟笑むは、參謀參與官の、中田元帥のみであつた。

在米の國士團巴奈馬運河を爆破す。

×××新聞社の、最上層に設けられてある、特設無線電話發受室の、一面に取付けられた真空球内では、絶へず青色の閃光を放ち、火花を散らす傍らに、戴頭受響器を耳に嵌て、指を蝸の吸盤の様な、發信鍵キに當てた儘、斷へず響き來る、ブーッの音に、小頸を傾けてゐる、偶像の様な技手が、遽かに兩手を舉げて、わあーと非常の叫び聲を

發し、殆んど眼を滿開るに眩くららき、戴頭器を着けた儘、起ち上つて、暫らく狭苦しい室内を、躍り狂ふた上、扉を蹴開いて、魔者まものの様な勢ひで、編輯室にと飛込んだ、唐突な、一記者の憑れる、椅子の背凭せを掴んで、揺り動かし乍ら、大聲で。

『爆發——、爆發——、爆發。』

と、叫んだ。

一同は思つた、明けても暮れても、獨り寂然として、複雑の様であつて單調な、神經のみを働かす仕事をして居る、無電技手が、必然てつきり、發狂したと想つたのだ。

『何が爆發したのだ、自分が爆發してゐるのではないか。』

と、一記者が聲を揚げた。

今度は。

『來た、來た、今、OMIが來た、巴奈馬運河の爆發——、巴奈馬運河の爆發——。』
と、叫んで、漸く少し氣が落付いたらしい、稍落付いて、報告するのを聴けば、巴

奈馬國際無電局は、巴奈馬運河の大爆發を報じて來たのである。

威風堂々、意氣己に日本を呑める、米國太西洋艦隊は、日本海軍全滅を夢みつゝ、

巴奈馬運河を通過してゐたのである。

其時、大旗艦リソルン號が、第三閘門に差掛つた時、巴奈馬運河全線八個所に於て、一齊に大爆發を起した。

嗚呼、巴奈馬運河の大爆發——、誰が何の目的を以て、敢行したのであらう。

社内の全員は、一齊に、硝子戸の毀れる程な、萬歳を唱へた。

忽ち言ひ合した様に、沈黙に復りて、直ちに大活動は開始された、それは、號外製作である、此一大快報の、滿都に傳はらぬ前に、先登第一の號外を發して、全社を歡喜させ、報導機關の敏活を誇らうと云ふ、大陰謀である。



テキサスとローザンヌとに、根據を占めて、全米國到る所の、在留日本人を強要り廻りて、米國官憲は勿論のこと、日本人間に寄生蟲の如く、嫌はれてゐた、櫻花團と稱する、何事をも腕力沙汰に訴へて、事を濟すと云ふ、丁度、徳川時代の博徒連を、米國式で行くと云ふ團體であつた、常に武俠的行動を以て誇りとしてゐた彼等が、日の風雲漸く險惡を示して來た頃から、何故にか影を潜めて了つた。

平時大言壯語をして、無暗に弱い者を苛める連中は、非常時に臨んでは、恚うした者だ、結局厭煩さくなくて宜いなごゝ、日本人同士が、竊かに喜んでゐたのである、其の常に爲す無き、無頼漢の集團の如く思はれて居た、櫻花團が、積年の苦心計畫に成れる、大陰謀を、今こそ母國の爲めに、生命を棄てる時であると、團員一同、神に死を誓つて、巴奈馬運河大爆發と云ふ、恐ろしくも眼醒ましき、大事を敢行したのであつた。

布哇全島に旭旗翻る

大被害を免れて、太平洋上に進出した、残餘の巡洋艦隊と、驅逐艦とに、顧慮することなく、布哇に向つて、急航せよとの、本國の電命によつて、水上飛行機に、偵察前衛を爲さしめつゝ、ノットの最大限を出して、直走りに駛り着いた時は、布哇島の各要塞には、既に日章旗が翻つてゐた、尤も、日本聯合艦隊の布哇總攻撃は、豫想よりも激戦であつた、駐屯せる米軍飛行機の爲めに、爆彈を投下されて、航空母艦宮島丸は撃沈さるゝ、驅逐艦二隻は、米潜航艇の爲めに、太平洋の藻屑に歸し、戦艦一隻は、敵の敷設水雷に掛つて沈没し、其他の艦艇悉く、多少の損害を受けぬものとは無き程の、苦戦に陥つた時、恰も、ホノルルの大兵營に監禁されてゐた、七萬の在留日本人が、猛然激起、内應した爲めに、米軍の最も優勢なりし戦況は、瞬時に變轉して、各要塞が、忽ちに白旗を掲ぐるに至つたのである。

全島に日章旗が輝き、洋上には、日本の大艦隊が、戦闘陣形の儘浮んでゐる、此の有様を望見した、打算的な米司令官は、直に全艦隊に、背進逆行の命令を下して、一先づ桑港を指して、遁走したのである。

信玄の遺跡に大本營を急設す

曩に、帝國國務大臣が、遷都の神命を蒙りてより後、昔時武田信玄が、據りて天下に武威を振ひし、甲斐の遺跡に大森を遷し、此に大本營を急設されたのであつた、尋で樞要諸機關が、悉く遷都地に移された、後の東京は、殆んど火の消えたが如き状態で、往年歐洲大戰の際、敵機の襲來を恐れて、闇い沈黙に蔽はれた、彼の倫敦よりも淋しかつたのが、巴奈馬運河爆發の大快報に次ぐに、布哇占領、聯合艦隊大成功の捷報に接して、滿都には、歡呼の聲が俄かに沸き、東京市民の一藝たる、旗行列と、提灯行列とで、非常な活氣を呈して來た。

日本政府が、暴慢なる支那に對つて、今まで宣戰の布告を發しないと云ふことには、機密な理由がある、是れは後に彼等を、馴致する上に於て便宜な爲めなのだ。

先づ砲門を開いた、軍隊を差遣するに、居留民保護の名目を以てし、大軍團を輸送する名目は、既設警備隊の増員と稱し、斯くして乃に衅ひまらさず、一兵を損せず、而も罪の無い支那土民を、塗炭に苦めず、一舉にして、日本の大糧食倉庫を、占領すると云ふのが目的であつた、然るに、悪垂れ小僧の背後には、不良少年が潜んでゐた、支那の艦隊は、何時の間にか、機敏なる、米國の太平洋艦隊と聯合して、整々堂々、忽然として、豊後水道に現はれた。

太平洋上に大戦利を得た、日本聯合艦隊は、今や那邊に在りて、如何なる行動を取りつゝあるのだらう。

敵艦宗谷要塞を欺瞞して無事通過す

渠れ信玄が、最も要害堅固と誇つた、城址に急設されし大本營には、沿岸各地より、危険刻々に薄せまれる旨の電報が、引きも切らず、飛來する有様である。

朝野を擧げて、餘りの不意討に、殆んど昏迷に陥らしむる程、驚愕せしめた、米支聯合艦隊の、豊後水道襲撃は、元より戰術上の、敵國襲撃の目的を、徹底的に遂行する程の、戰略を以て襲來したのではない、是れは米國が北海を経て、日本海を縦斷し、支那に上陸せしむべき、大遠征軍が、宗谷海峡を通過して、日本海に進出すべき、航程を計慮して、日本海軍と、國民の注意とを、通路の反對の方向に、集注せしめんとする、牽制運動が目的であるから、陸上の被害としては、僅かに某海岸を、三十分程砲撃されたに過ぎなかつた、彼れ敵艦隊は、何等防禦なき沿岸のみを、示威的に遊弋して、更に北東に向つて、進路を取りつゝある状を示してゐる。

神經の最鋭角を示してゐた、宗谷海峡の要塞は、濃霧を利用して、日本海軍の、發光信號を模倣した、米陸軍輸送船に、まんまと欺瞞された、要塞司令官は、何等疑ふ

所もなく、

▼異状なし急ぎ通過せよ。▲

と、信號應答を與へた。

多數の敵艦船に對つて、異状なし、急ぎ通過せよと、信號せし防禦軍は、戦史あつて以來、嚆矢とする珍事實である。

斯る間に、新潟港より極めて秘密に、乗船出發した、三個軍團の大部隊が、米國陸軍に先つて、福建の某所と、太沽附近の采所の兩海岸より、何等敵對行爲の妨害を受けないで、無事上陸を完了したことは、大舉襲來した、米軍の機先を制して、戰略動作が非常に有利となつた。

布哇總攻撃に大捷を博した、日本聯合艦隊は、戦列を整頓して、威風堂々、全速力を以て、金華山水道を通過し、軍司令部よりの命令に従つて、豊後水道に襲來した、敵艦隊を掃蕩し乍ら、臺灣を回復し、朝鮮水道に向ふべき、任務を有つてゐるのである。

時は何物にも單一である、機は刹那に運る、既に米支聯合艦隊は、銳氣を恢復して、桑港を出發せし、太西洋艦隊に合し、新たなる大活動を開始すべき、無電に接して、A水道を、東に東にと駛走して、既に太平洋上の眞つ只だ中に、航行し去つたのであつた。

朝野の翹望して居た、日本聯合艦隊の消息は、長蛇を逸したことを聞いて落膽したが、臺灣回復と云ふ、大目標に向つて、慕進を續けてゐることを知つて、一刻も早く吉報の到るを待つて居るのである。

大英國運衰兆仄見ゆ

大西洋の波を打越えた、北亞米利加の風は、西歐の隅から隅まで、吹き靡びかした様な感があつた、焉ぞ知らん哉、風を望んで化せずであつた、英佛を始め、諸邦が纔かに、皮層の新らしい、輕薄誇張の風を、眞似たに過ぎないのであつた、眞に厭ふべ

き米國の實力が、人心を風化し、根強い力を深く植え付けたのが、却て東洋であつた、而も其れが、日本と支那とである。

今や歐羅巴の天地は、巴爾幹に割據する、一小國に至るまで、悉く皆な國を擧げて英國を窘窮せしめ様と云ふ思想が、澎湃として漲つたのである。

春秋三百年の、傳統的國策を以て、根柢を固めた、英國の潛勢力も、聊か功を現はさないで、例の外交手段は、遂に列強を動かすこと能はず、米に約せし世界宣傳も、僅かに加奈陀と、濠州とに、^{さか}効果を現はしたに過ぎなかつた、而も世界第一人者を以て、自らも任じ、他も容してゐた、歐州列強に、比肩するものなき、彼れ英國大海軍が、各國の商船輸送を、少しも恐怖を起さしむる程の、襲撃を敢てしなかつたのは、奇現象と云ふよりは、近時英海軍の、軍紀と士氣とが、如何に弛緩して、昔日の倂を遺さ無いと云ふことが明かに判かる、其れにも拘はらず、同盟十四ヶ國が、我が日本に對して、實際に物資と兵力との、援助を實現することの出来なかつたと云ふものは

英國地中海艦隊が、蘇士を扼した爲めに、海上輸送は、喜望峰の大迂廻を取らねばならなくなり、それも新嘉坡に於ける新要塞の大威力に、睨まるゝことになつたからである。

殆んど陸上の國境を撤廢して、只だ一脈の西比利亞線に依るの外、途が無くなつた爲め、あらゆる物資と、最新式の特科部隊とを、莫斯科に集中し、露國も全力を擧げて、西比利亞線の大運送を開始するや、時恰も、日本海上風荒び波怒る、大危険に襲はれたのである、斯くて彼等の誠意と焦躁とは、局面が一大轉回を起さなければ、丁度橋の無い對岸の火災を、看てゐる様な状態に陥つた。

婉麗の日本女傑印度革命を助成す

茲に偶然乎。天意乎。將たまた、一個の憑靈現象乎、世界の懦夫をして、能く蹶起せしむるに足る、一大快報が、南溟の一角より、熱血に富める日本男子の耳に傳はつ

た、それは、南洋蘭領の一小島に、宛然一小王國を現出せし程の大成功を遂げ、諸種の事業を、大規模に經營してゐた、三島某と稱する夫妻があつた、其主人は惜い哉、未だ雄圖の半ばも遂げず、數年前に冥界の人となつたのであるが、未亡人たる其妻女は、能く亡夫の遺志を繼ぎ、生前の徳化に由りて、部下が咸く献身的服従を爲すと、和蘭政府の信用保護の厚きとが爲め、彼れ三島王國は、益々南洋の天地に勢力を張つてゐたのであつた。

年齢は三十を越しても、容姿婉麗にして、恩情何物をも服従せしむる彼女は、單なる魅力を具へた、才女ではなかつた。

常に本國に容れられず、海外を流浪して、徒らに風雲の到るを待ちつゝあつた、日本浪人を、平素物心兩方面より、多大の庇護を與へて、自家の傘下に集めて置いた、此の美人の親分は、母國の大事に接するや、忽ちに女丈夫とはなつた。

三島未亡人は、自家所有の巡洋艦に、幾んど驅逐艦程に武装して、自ら乗込み、期

する所があつて歟、豫て養つて置いた、愛國の志士百餘人を引率し、緬甸の某港を指して、出發したのであつた、巨額の軍資金を擁して、印度に上陸した女傑は、平素如何なる聯絡のありしか、ガンヂー一派を指嚇して、瞬時に全印度の軍隊を、懐柔軟化せしめた、其の活動振は、寧ろ魔力とでも謂ふより外なかつたのである。

斯くて内外呼應して、一連り血の雨は降らしたが、多大の犠牲も拂はずに、摩都の英國印度政廳を、完全に占領したのである、斯くも驚くべき印度大革命は、婉麗化の如き、日本女丈夫の一煽手によりて仕遂げられたとは、印度の天地に其勢力を失墜した、大英國を、老獅の致命傷を受けて斃れた如くに、歐州列國の誰もが見たのは、當然の觀察と言はねばならぬ。

我が日本は勿論のこと、同盟列國の歡喜は、頂點に達した、其の正反對に、當の英米兩國に於ける、失望、落膽、恐怖、混亂の狀は、眞に想像に餘りある。

神命に背きて我海軍飛機艦隊共に全滅す

海軍飛行隊は、聯合艦隊が、臺灣島の回復襲撃に差掛る前に、敵軍の海上敷設作業を、俯瞰偵察を行ひつゝ、麻尼刺を襲撃して、臺灣に根拠を占めた米軍飛行機を、比島援護の爲めに出動すべく、此方面に誘ひ寄せ、聯合艦隊をして其虚を衝かしめ、聯合艦隊の、戦闘動作を易からしめんとする戦略であつた。

一體戦争と云ふものは、偶然の續發によりて、結果を收むる定理のものである、即ち其突發した偶然が、不利を招くべく立廻つた方が負け、有利に立廻つた方が勝ち、斯くして優劣が分れ、勝敗が決するものである。

是れも偶然の支配が、誘ひ出して、邀撃すべく期した臺灣の米飛行隊は、早く既に比島に来て居たのだ。長驅して到れる、我が海軍飛行隊は、時を移さず、比島の上空に於て、米飛行隊と、激烈なる空中戦を行ひ、公表を避けねばならぬ程、彼我の懸隔

甚しき、我が飛行機軍は、奮戦の限りを盡したが、無慘にも全滅したのである。



近時非常の進歩を示した。網狀聯鎖に成る敷設水雷は、一定の隔離を以て、飛行機上から、海面を俯瞰しなければ、之を發見することが出来ないのである。故に大艦隊の航進に當つては、以前の如く、驅逐艦の先驅掃海を以てのみ、安心して航行することとは出来ない。然るに、我が海軍飛行隊は、斯る重大なる掃海任務を果さぬ前に、比島の上空に於て全滅した爲めに、我が聯合艦隊は、可能の範圍に於て、最善を竭して極めて姑息な、警戒航行を續くるの止むなきに至つたのである。

噫々、天怒れる乎、海若無情なる乎、我が海軍は、天祐を保全し神惠渥しと確く信じた、三上司令長官の坐乗せる、旗艦を眞つ先きに、小型巡洋戰艦一隻、驅逐艦一隻通報艦一隻を残せしのみにて、海水は猛火と化し、狂瀾は天に冲せしかと思ふ、瞬間

に、雄姿堂々たる帝國海軍の艦隊は、盡く轟沈されて、海面に片影だも留めないの
ある。

通報艦が、狼狽を極めて、續々として發する、無電報告を受けた、大本營軍令部は
戰術常識を以て、信することの出来ない程、極端な大凶報を見て、受信者が慌て、誤
譯せしものと曲解し、反對に、米軍の全滅と輕信して、萬歳を唱へた、參謀官すらあ
つた。

事實と云ふ眞理は、悲喜を顧みざる、嚴烈なる命令者である。續々たる公報は、聯
合艦隊全滅といふ、大椿事を、確實に證明した、從來の軍事當局者であつたならば、
斯る大凶報は先づ秘密にして、小田原評定を開始するのであるが、舉國一致、大國難
に奮闘する國民は、開う云ふ遊戯は許さない。

大本營は直ちに、我が聯合艦隊が、某地點若干哩の海上に於て、敵の巧妙なる敷設
水雷に掛り、瞬間に轟沈全滅せりと、發表した。

日本政府自暴自棄と爲る

國民全體が、殆んど、狂的狀態に興奮したのも、一時の發作に過ぎない、朝野を舉
げて、宛然、喪の如き、悲觀沈靜に陥らしめた。

當局は。

▼今は非常の時なれば、引責は他日に期す、今や帝國は、天祐を失ひ、神護に離る
人智の最善を竭して、最後の奮闘を試みんのみ、吾曹の立場を、國民の諒解に須
つ。▲

と、宣言した。

識る人ぞ知る、國民の大半は、宣言の意の那邊にあるかを惑ひ、却つて了解に苦し
だ。

政府當路の斯る無神論的、自暴自棄の宣言の裏面には、そも何を語りつゝある乎。

るまい。

失踪の我飛機支那に於て大成功を收む

吉報來——、吉報來——、悲觀のどん底に沈んだ國民は、猝かに愁眉を開いて、歡呼の聲を揚げしむる大快報は、西天の一角より飛來した、それは、彼の大問題を惹起した、行衛不明となつた陸軍飛行隊が、支那大陸の上空を目掛けて、猛飛行を試み、操縦者。搭乗者悉く生還を期せず、決死を以て支那各地の、重要軍事機關、軍用鐵道橋、戰闘員大部隊の屯營を全部爆彈擊破粉碎して、大成功を收めたのである。

更に勝に乗じた飛行隊は、支那の大破壊を後^{しり}勝に見ながら、臺灣の上空に轉戦すると云ふ、無線電信であつた。

豹變食言の本家とも謂ふべき、支那當局は、今後如何なる方策に出づるであらう、噬臍の悔なる辭を作つて置いた必要も、今更思ひ合されて、笑止千萬である。

帝國の戰時財政破壊に瀕す

天體といひ、人事といひ、相踵いて湧き來る未曾有の珍象に、遽^かたゞしくも逐はれてゐた、國民の頭上に、最後の一大鐵椎とも謂ふべき、日米戦争は展開せられたのだ。

此の帝國が死活を決する、大戰禍も、奇蹟的天祐を以て、朝野の期待せしよりも遙かに効果を收めて來たのであつた、それが、蒙昧なる當局者の、神命に背くに至つて、殃災的戰敗を重ね、企圖方策は齟齬し、國民の恐怖想像にあらぬ、帝國滅亡の危機は、事實となつて迫つて來た。

人は、外界の刺戟に熱狂して居る時は、壺中の空虚なることには、氣付かぬものである、國家は、朝野を擧げて時々刻々に變轉する、遠近の戰況の送迎に急がれて、囊中の員數を査^あむる暇もなく、方途を失して悲境に沈み、靜思して方^まに捲土重來を惟ふ

の時、猝かに囊中一物も留めざることに、氣がつくものである。

開戦前既に、四十六億八千萬圓の國債を脊負つてゐた、我が帝國は、開戦後、締盟列國も、國策自營に急がれて、正貨を以て我が國を援助することは叶はなかつた、今日までに、帝國政府の發行した不換紙幣が、既に百億を超過して居る、宣戦前、非常な犠牲と、高價を厭はずに、秘密に諸方より購入した、海軍燃料の正貨支拂額が、三十五億を超過して居ると聞いたなら、何人も今次の戦争には、莫大なる軍費の膨脹を來したと云ふことに、想像が付くであらう。

資産半額徴收令も出た、農業義務耕作令も出た、食品強請徴發令も實施され、正貨即時徴發令も施行された。今や財政運用上に於ては、施すべき術が盡きたのだ、國家が存立して、國民が個人的社會生活を繼續する間は、貨幣は、生活要素の第一主要物であらねばならぬ。

一舉に帝國の全領土を、殲滅せんと薄りある、米軍大飛行隊に破壊されない前に、

帝國は自家財政の窮極によりて、破壊せらるゝの破目に陥つた。

甲斐國の山中に假設された、大藏省財務局に於ては、財政當務官並に、主腦銀行家との、緊急會議を開催することゝなつた、刻々に迫る危機を前にして、軍費缺乏の善後策を議する、協議會は、果して如何なる妙策の案出を見るであらう歟。

惟神團體神藏の寶庫を開く

數日に渉る財政會議は、政府當局に於ては、打歩の低價は覺悟の上で、更に不換紙幣を發行するより外に途はないと主張する、金融側の代表者等は、國民一部の團結心を覆すは勿論のこと、財政を根本より破壊する、斯る不合理なることを、更に遂行することは出来ない、故に最後の準備金に手を着けるより、外に途はないと主張する。事窮すれば論争に終るは例いである、何等具體的の成案を見ないで、論争に終つて了つた、國庫が最後の準備金を、盡く支出しても、猶ほも時局が繼續したならば、其

後の財政運用は、如何にするであらう。

然れども軍國の活動は、瞬時も停止することを許さない、當局は、愈々最後の準備金支出を決心した。

此時に方りて、彼の神命を奉ずる團體は、國策に關し、或は軍事行動に關しては、斷じて神命を傳ふことは拒むが、軍費通貨に就いては、不便を生じあるならば、正貨を以て、相當の便宜を與ふることを厭はないと、總理大臣に對つて、突如として申出でた、何んと、皮肉な申込みでは無いか。

世外に超絶して、常に神事奉仕をのみ、専らとする團體に、如何なる確信があるのであらう、當局も一時は疑惑の眼を注いだ。

神命を危ぶみ、神命を疑ひ、神命に背きて以來、國家は急轉直下、刻々に危險に瀕してゐるではないか、然しながら未だ、殿下の御説もなく、例の一關老將軍も緘黙して居る爲め、彼等は心中私かに畏怖後悔するのみ、如何とも致し方が無くてゐた所へ

最も焦眉の急を要する所の、財政援助申込に對して、彼等は歡喜勇躍した、精も根も盡き果てた、總理大臣は、脆くも膝を屈して、従者も伴はず、單身自動車を飛ばして例の幽邃閑雅なる、神屋を訪ひて會見を申込んだ、神司長は會はぬ、代つて接見した人物こそは、神恵を一身に集め、神示を確信して、昨年來一身を抛ち、三ヶ所の秘密金鑛を發掘して、國家奉仕の時機到來を待つてゐた、本團體の山村會計課長である。

今や、帝國財政の危機を既倒に回すべき、大任務を双肩に荷へる、白面の一壯漢と老首相とは、此に如何なる條件の密約を結んで、救濟を受くるであらう乎。

平素は、寡言靜肅にして、只だ温順しい貴公子と目されてゐた、山村課長は、今日は殆んど別人の如き、毅然たる態度を以て、首相に對つて、却々銳鋒を差向ける。

『本問題を御協議する前に、私一個として、閣下に御訊ね致したいことがありますか……』

無言で、首相は頷いた。

『恐多いことではありますが、大内に於て、篤き御信仰が變らせられず、御方策に於ても威く神命を奉ずると云ふことを、御誓ひになつた閣下が、此の大危機が、まだ半ばにある今日、御上よりも、何等變つた御沙汰も無かつたのに、當方へは何等御挨拶も無く、突然、今回の様な、宣言を御發表になつたと云ふことに就ては、是れは私共が是非御伺ひをして置かなければならぬ、重大な理由があること、恐察致します、せめて、忌憚なき御所感なりと、十分に承りたいと存する次第です。』

礎はたと迷惑氣な顔をした首相も、不用意乍ら、答へぬと云ふ譯には行かぬ。

『いや今日は、斯る御訊ねを蒙るべき、考へがなく、聊か問題外と感じますが、責任上要旨を一應釋明致します、率直に申しますと、誠に恐多い次第ではありますが、事柄によりましては、各専門の法則と、從來の經驗がありまして、各擔任の責任者が、事毎に理論を超越した、神命を一概に遵奉實行すると云ふことを、承知致しません其の爲

めに已むを得ず、從來經驗上、合理的と信する方針を行はしむ、开う致しますると、御神命を奉じなかつたが爲めに、忽ち嚴罰を科せられる、國家が今次屢々多大の失敗を被れることは、貴下も御承知の事と信じます、开う言ふ様な理由で、協議の結果、人間の力を竭して、而して倒れて後已むと云ふ決心の下に、宣言致しました様な譯で、他に何等の理由が無い次第であります。』

しどろもどろの首相は、恚こん麼な拙い答辯は、議會に臨んでも、恐らく前後例の無い不出來なものであらう。

『其れ丈の理由でありましたならば、閣下の御見解は大僻事と言はねばなりません、何となれば、人智を以て測り知ることが出来ない、世界の危機に直面して居る人間共が、救済を請ふべき御神命の、合理不合理を論難批判すべき資格がありますか、第一、神命に背馳せる方策を進めて、當然歸着すべき結果を捉へて、之れを直ちに嚴罰など、速斷せらるゝと云ふことは、甚だしき非違と信じますが、今閣下の仰せらるゝ

大失敗は、悉く神命を拒まれたる後に、招徠した事柄ではありませんか、我等の小智を以て、到底測ることの出来ない、合理不合理を超越した、絶大なる神命を遵奉してこそ、大奇蹟も、大救済も、實現すると云ふものであります、失禮乍ら閣下の今仰せられた理由では、神威を冒瀆されてゐると云ふことは、明かであると信じます。』

斯ういふ、單純幼稚な追窮に對しても、首相は、平時得意の詭辯を弄する勇氣がない。

『何んとか、非禮を神に謝して、更めて、御神命を請ふ譯には参りますまい歟。』

何といふ憐れさであらう、吾輩は一小郷里の者にあらず、天下の士なりと豪語せし當年の勇氣は何處へやら、氣の毒にも感じた、山村課長は。

『私一個人が、今其の御確答は出来ませぬが、兎も角、本問題を御協議することに致しませう。』

『官權武力を有する吾等が、見らるゝ通り、今日は萬策が盡きて居るのであります。』

此方に於ては、如何なる御神力を以て、御援助下さるのか、吾等得心が参る様に、一應、詳細なる御説明が願はしく、態々、御邪魔致した譯です。』

『御尤もです、大神が、今日あるに備へんが爲め、帝國三ヶ所の深山に、古へより藏して置かれた所の、大金塊を、不肖等、昨年来神命を奉じて、採收致し、秘密に建設した工場に於て、直ちに、通貨に鑄造が出来る計りに、加工して置てあります、それを今回、閣下方の非違を、私情を以て御尤めする場合じやない、皇國の大危機でありますから、是れ亦、神命を奉じて、然るべき條件の下に、提供致したいと云ふのが、當團體の希望であります。』

色を失つて、戦慄し乍ら、聽いてゐる首相の心裡は、抑も驚愕の頂點乎、恐怖の頂點乎……、稍くに緊張を回復して、再び問を續けた。

『私も、神威の峻烈なること、難有いことが、始めて了解致しました、御條件を承る前に、其神告げの個所は、何所でありましたか、参考の爲め、御洩らしが願はれます

まい歟。』

『それは、東北地方に於て、二ヶ所、四國に於て、一ヶ所であります、後に圖面を以て御説明申上ませう。』

『左様願ひませう、御條件の要點は。』

『第一、只今提出します條件の御約束は、内閣令に準據して、歴代内閣の繼承權を、確保して頂きたいのであります。』

第一、政府は、政策の爲めに、皇室の御信仰に對して、干渉せざる事。

第二、政府は、全國大小神社の、主神社格を、神命に基いて正す事。

第三、政府は、國民教育の、根本組織を、神命に據る事。

第四、世界統一會議に於ける、議案並に、各國に對する、最惠條約は、神命を蒙る事。

第五、惟神の大道を以て、國教を定むる事。

第六、世界統一後、各國の國防軍事を、廢止したる後は、神護團を組織する事。

第七、伊勢の大神宮を、世界の神域と奠^{さだ}むる事。

第八、帝都神宮の附近に、淨地を卜し、政府は、八百萬の神、遙拜神殿を築造する事。

此他、社會問題に關する事柄は、何れ御協議致することとして、先づ是れが、當團體の希望條件の要點であります。』

首相は、額の脂汗を拭ひもあへず。

『いや如何にも、肯綮^{かた}に中^{あた}る節もあります、取敢へず閣議にかけ、一應、上聞に達しなければなりません、其點の御了解が願ひたい、更めて御沙汰致します。』

と、即答を避けて、一寸も速く、金塊の授受を了したい首相は、倉皇として、辭去した。

神惠の金塊盍國の元氣を活躍せしむ

旱天の雨よりも喜ぶべき、此問題が閣議に於て、閣僚一同が、如何なる條件に對しても異議なく、意見を纏め得らるることは、素より首相としては、期してゐる所である、案の如く、閣僚一同、異議がなく、此の大危機を脱して、國運の興隆を見るに於ては、何れも國家の進運に對して、支障を來すべき因となる様な、條件が無い計りでなく、實に高潔崇高なる要望であるから、條件も協定も、首相に於て、専ら事に當ること、直ちに決議された、但だ、御前に伺候して、今更、前後の事情と、自分の今迄執つて來た處置とを、委曲伏奏することが、首相に取りて、最も辛い所である。

鞠躬如とし、御前に伺候した首相は、暫く沈黙せざるを得ない、垂れたる頭上に矢継ぎ早なる、御詔が下りた、それは。

▼斯る絶大なる、神惠の下ることは、予の謹んで期してゐたのである、是れに就い

て、彼方の提議に於ても、彼等聊かも、感情を挿む筈が無い、咸な聽入れて、速かに國難に處せよ。▲

との御趣旨であつた。

首相は、恐懼と感激とに、一語も發することが出來ないで、詳細なる説明は、奏上せず、感泣して拜辭した。

斯くて内閣と、彼の團體との間に於ける、正式交渉は、極めて迅速に取運ばれ、條件と顛末とは、閣令を以て、國民に發表された。

此の發表に接した國民は、重さなる戦局の不利も、米軍の襲來も、殆んど、忘れ果てた程の大歡喜をして、其の爲めに、國民全體は、勃然として、大勇氣を起し、士氣を振ひ興したことは、想像の外である。

首相は、契約本條の各項は言ふ迄もなく、諸種の國內社會問題に對する諸項まで、悉く承認した上、更に國政一切を、神命を遵奉して、施行すべき事を、改めて誓言す

る有様であつた。山村會計課長と、藏相との間に、數次の往復を重ねて、全部の授受も、無事に完了した。

五千億の正貨準備が調ふた、帝國は忽ちに、國運轉回して、徒らに歡喜に過ぎたる國民の期待に副ふ様な、効果を收むることが、得らるゝであらう乎。

惟神團の幹部參内嘉賞を蒙る

金線の通つた、高級な自動車に、迎へ乘せられて、彼の神屋の團體の、最高幹部等は、遽かに、何れにか出掛けた、禮装を整へた、同乗者の中に、一關老將軍の顔が見えるから、出先きが、何所であるかは、略ぼ推察するに難からぬ。

九重の雲の上の事共は、徒らに忖度することを許さないが、惟ふに、尊貴の御前に於て、神勅を陳べたのか、或は神筵を開いて、神詔を承け給ふたのか、何れ三韓の役

以來の、古式が嚴肅に行はれ、併せて、彼等團體が、今回の奉公に對して、御嘉賞を蒙つたのであらうと云ふことは、略ぼ推察することが出来る。

神は、元よりの經綸、知るも識らぬも無い、地上、現界に在つては、帝國國運の歸結を知るものは、雲井遙かの大内と、彼の團體のみ乎。

在支我三個軍團毒瓦斯の爲めに全滅す

神奇靈と云ふ語を以てしても、到底十分に、其意を表現することの出来ない程、咄嗟の間に、大軍費の充實したことに依つて、俄かに勇氣百倍、歡喜有頂天になつた、國民の頭上に、又しても、一大鐵椎は下された。

それは、かの曩きに勝に乗じて、長驅臺灣奪還に向つた、我が帝國の飛行隊が、未だ臺灣の上空に到らぬ前に、常に無電の利用を、極度に行ひ、機を観るに敏を極むる米軍飛行隊は、臺灣を空虚に爲して、最新式の毒瓦斯を滿載して、支那大陸に飛び去

つたのであつた。

配置區域三十六平方里に渉る、我第一軍三個軍團の頭上に、一齊に投下された、**光**軍の毒瓦斯弾は、何れも見事に炸裂した。一弾の瓦斯膨脹力は、地上一哩平方、間隙もなく、瞬間に充溢さるゝ猛烈なものである。

日本軍が携帯せし、完全を誇つた、かのマスクも、彼れ猛烈なる毒瓦斯の、滲透力を防止することが出来なかつた。

人畜盡く眠れる儘に斃死した、三軍悉く萎へ伏すとは、斯ることを言ふのであらう。漸く生せし帝國の内閣は、此の一大凶報を、國民に知らせたくはなかつた。噫。

然れども、國民に知らさず置くことが出来る程の、些細の事柄ではない、公開主義を取れる、參謀本部は、逸早く詳狀を發表した、國民が極度の憤慨と悲嘆とは、詳記するに忍びない、讀者の想像に任すことにしやう。

神示に依り放電装置を三十二箇所に設く

豫て軍事當局に於ては、神示に本いて、房州北條の海岸、輕井澤の陣屋跡、駿河の久能山、鳥羽港、宇品港、九州は祖母山、長崎燈臺、竹敷港、能登岬、大湊、室蘭港、稚内港、小笠原父島、其他秘密の個所、合せて三十二個所の樞要地點に、大放電装置を建設すべく、營々工事を急いでゐたのである、是れは領海に出沒する、敵艦船の無線電信を、攪亂するのみの目的では無かつた。

米國が、今日あるを豫期して、シャートルに、全力を集中して建設した、無線電流放射所が、放送する電波によつて、最も完全に装置された、無線感電機を具ふる、米軍飛行機は、能く我が帝國の上空に、活動することを得るが爲め、これが襲來せし際に、此の要所々々の放電所より、強烈なる電流を放射して、敵機が未だ陸地に接近せざる前に、感電墜落せしめて、防禦の目的を達しやうとする、設備なのである。

然るに、今や十時間前より、何れより送電呼出しを爲すも、小笠原父島の軍用無線電信局は、何等の應へもせぬ、布哇に於ける、我が守備隊の無線電信は、小笠原島は如何なる方法を以て送電するも、異状反應だに來さぬ、或は米飛行機の爲めに、襲撃爆破されしものと思惟する、警戒を要すと、大本營に宛て、打電して來た、小笠原島が、果して米飛行機の爲めに、爆破されしものとしたならば、本土各所に建設した、彼の電流放射は、能く功を奏して、敵機撃退の使命を完全に果すことが出来るであらう歟。

當局者は、深い憂悞の雲に鎖された。

米國航空設備の秘密を發く(本書編成の材料として神界の偵察隊一夜にして取調べ來りし米國航空界現在の實狀)

參謀本部の航空課は、米國航空隊の戰時編成と、完備せる彼の飛機の大威力を知つての上にて、斯くも成算ある、防禦準備を爲しつゝあるのか、國民は其真相を知らず

昔時の蒙古來の如く、只米國なるが故に、恐るべきものであらうといふ、漠然たる恐怖に過ぎないのだ。

米全土十四個所に設置しある、廣大なる陸軍飛行場の外に、百七十二個所に在る、民間飛行場と、相待つて、彼等は常に多大の犠牲を厭はずに、操縦術の練磨に勗めてゐたものである。

今や、米軍航空隊は、六部に分れ、各部を通じて、練習機を除いて、完全なる戦闘機が、七千四百臺、纔かに装置を加ふれば、直ちに戦闘に参加し得らるゝ新式機が、各部を通じて、六千六百臺、民間飛行機は各型を通じて、戦闘に任へ得るもの、實に一萬四千七百臺の多きに上つてゐる。

戰時編成に係る六部は、遠距離飛行部、偵察飛行部、戦闘襲撃部、飛行工作部、材料輸送部、補充部、各部類を、此の如く整頓せし上に、遠距離飛行機には、悉く二十分間の空中静止を爲すことの出来る、安定装置が施されてある爲め、航空中に於て、

機關に損所を生せんか、搭乗者は、直ちに他機に移乗することが出来る、殊に遠距離飛行には、必ず工作機が附隨する爲めに、破損せし飛機も、墜落の厄に遭ふことなく飛行不能と爲つた機を、工作機が、左右より之を支持して、飛行を繼續し乍ら、應急修繕を加ふるのである。

殊に四百五十馬力の、米國陸軍式發動機を、複式に装置した、輸送機は、一機が二百時間に亘りて、飛行し得る材料を、三機分搭載する能力を具備した、恐るべきものである。

就中、鳥翼型式の戦闘襲撃機は、麻布に一種の、エポナイト状の塗付液を滲透せし電流絶縁被覆を、要部に施した上、最近の發明にかゝる、絶縁エナメルを、露出部に悉く塗付してある、此襲撃機が、一機に就き、一彈の重量、僅かに二斤に過ぎざる、燒夷彈を十六個搭載して居るのである、而も此の小炸裂彈を、目標物體より、上空纔かに五百米突以上距つて、之を投下すれば、其爆破力が、優に五十米突四面を粉

碎するのであるから、即ち百米突平方の間は、忽ちに破片だも留めぬ、燒土と化するのである。

又此れに搭乗する將卒は、各自皆な脊に救命風袋なるものを負ふてゐる、此の装置は、百五十米突以上の所より、落下するに於ては、空氣の壓力を利用して、忽ちに救命袋上に膨脹を來し、之れに繫索せし物體は、凡て其重量を三分の一に減じ得らるゝのである、而も米機は、一時間四百哩の航程速度を保つて、自由なる旋回運動が出来るのである。

殊に着目すべきは、米軍飛行機は、如何なる任務に服すべき機體と雖も、一個の滑走車をも附せざることである、其れならば、垂直飛行が可能であるかと云ふに、如何に科學の精妙を窮めし米機も、直垂飛行丈は、多少實驗を経てゐるものもないではないが、未だ實用に適するものは出来てゐない、然らば如何なる補助装置を以て、滑走作用に代ふるのであるかと云ふ疑問は、専門當務者にあらぬ、素人に於ても、第一に

起きなければならぬ疑問ではないか、其れは即ち、機體下部の前方に一ヶ所、後方に二ヶ所、並列して極めて細き、僅かに三呎に過ぎざる、舟型櫛を、三ヶ所に付して置くに過ぎないのだ、乃ち其櫛の物觸面、是れが硬質玻璃の象眼である。

斯る精妙なる装置を完備せる、米軍航空隊は、如何なる遠征組織を以て、帝國の本土に、襲來せんと爲しつゝあるか、鳥翼式戦闘機五百臺、材料輸送機二百臺、補充機二百臺、工作機百二十臺、空雷三百發を搭載せる、偵察任務の硬式航空艦二十八隻、斯くも秩序整然たる組織を以て、戦闘序列を作り、亞弗別加熱地の上空に、群を爲して獲物を漁るコンドールの如き、荒ましき勢を以て、天日を蔽ふて、皇國の上空に薄つて來たのである。

小笠原島は、大本營着電の如く、果して米軍偵察任務の、硬式航空艦の爲めに、爆破占領されたのであつた。

全國各戸が、燈火を廢しても、夜を失つて闇の來らざる世界は、敵飛行機の眼を暗

らます、カーテンがない、國民は單だ恐慌を來すのみにて、深い智識的の恐怖ではないが、軍事當局者は、専門智識を以て、撃退は愚か、到底防禦を全うすることが出来ないものと、殆んど、自暴自棄に陥つて了つた。

決死を以て上空に戦ひ得る、我が飛行機は、海陸兩軍の航空部隊を合して、僅かに二千六百臺、其他は悉く、各方面の任務に服して居るのだ。

唯、一縷の望みは、かの強力電流の放射歟、奇靈なる神の威力歟。

帝國の航空隊は、特種なる空中滑走に於ける、妙技を有する自信はあるけれど、固より多大の犠牲は覺悟の上で、何れも決死の志願者が、搭乘操縦して、電流放射の試験を行つた、試験は見事に出來た。

放射場より十哩を隔てる、千五百米突の高所に於て、操縦不能となり、機翼傾斜の儘空中滑走により、危く水平飛行に回轉して、墜落を免れた者、二十六哩を隔てた、

海上八百米突の上空に於て、急激なる機關の停止を生じ、海中に墜落して、搭乗者のみ危く驅逐艦に救はれた者、海岸より六哩を隔て、二千米突の高空に於て、急激なる逆轉に遭遇せし者、其他海上に墜落せし者二機、陸上に墜落せし者五機、遂に操縦者二名の慘死をさへ見るに至つたのである。

實に強力電流放射試験は、豫期以上の効果を奏して、戰闘參加員は言ふまでもなく此の報告に接した、全國民の士氣を振はしめたことは、非常なものであつた。

米機の襲來、恐るゝに足らず、何時でも來れと云ふ、意氣込みである。

牢記せよ四月二十四日——皇國滅亡の危機

四月二十四日——此四月二十四日こそは、日米兩軍の忘れんとして、忘るゝことの出來ない、魔の日であらう、否、日本國民としては、到底何時迄も、回顧を遺るゝことの出來ない、眞正の奇蹟を、始めて目の前り睹た、紀念すべき、吁々、四月二十四

日………。

四月二十四日午後三時二十五分、大島の海軍無線電信所は、秘密暗號を以て、本島を北に去ること一哩の上空を、南西指して飛走する、飛行機見ゆとの報告は、各要所に傳へられた。

第二號地は、直ちに強度の放電を開始した、第六號地も、第十一號地も、熾んに放電を起した、敵に目標を示すべき、極めて危険なる方法であるが、強力放電の今は、此れより外に途がない、即ち敵偵察の繫留氣球は、海軍の手によつて、各所より飛颯された、偵察するまでもない、報告を聞くにも及ばない、米航空隊は、遷都の迹の脱けの殻の、東京を襲撃する程の愚擧は敢てせぬ、幕地に目指す、第一の目標は、日本の紐育、大阪市であつた、一隊は大阪築港の上空に現はれ、一隊は淀川縁を溯つて大回轉を爲し、大阪市の背面に現はれた、第六號地の強力放電、第十一號地の強力放電、第八號地の強力放電、幾んど、電流が盡きたかと思ふ迄に、強力なる放電は續け

られた。

米航空軍の襲撃機は、怪くともせず接近して、先づ威嚇と偵察とを兼ねたる、第一弾を投じた、冲天の水柱と與に、築港の突堤は影を失つた、轟然たる第二の爆音があつて、黒煙が北に靡きて、吹き拂はれた時は、天王寺の古塔が、影だもない。

只だ一發の、飛行機射撃砲だに發射せぬ、我が防備軍の幹部連は、何故に斯くも接近が出来たかと、米飛行軍に、質問をせんとする程の狼狽さで、動顛を極めたのである。

大阪市民の驚愕、失望、擾亂の光景は、難詰なる數語を列ぬるよりも、寧ろ讀者の想像に委すのが、最も痛切であらう。

帝國が、最後の望みを繋いだ、電流の放射は、かの如き試験に、好成績を示したに拘はらず、斯くも、何故に無功なのであらう、それは帝國が、一億五千萬の巨費を投じて、全力を注いだ、強電放射装置が無功なのではない、科學萬能の米國が、心血を注いで發明した、襲撃機の大秘密を知ることが出来なかつた爲めである、即ち襲撃機

各個に秘密に装置された、電氣學界の大驚異ともいふべき、自動開閉蓄電池である、僅かに一呎半立方の、自動蓄電池こそ、大なるマジックボックスである、是れこそ米飛行機が、マグネット装置を廢して、シャートル放電所より、放送し來る電波を、此秘密函に感應蓄電して、本國を離れた、遠隔の敵地にあつて、自由に活動の行はるゝ大威力の根元であつた。

斯くも莫迦々々しき失策が、又と世にあらうか、本國より放送を受くる電流の、緩漫稀薄に苦しむ、敵機の便益の爲めに、極めて強力なる電流を供給して、層一層、敵機の行動の敏活を補助したことゝ爲つたのである。

米軍航空隊は、是れ天帝の冥助とでも稱へて、歡喜勇躍したことであらう、今日は帝國第一の都市と誇つた大阪も、瞬時の後は、燒土と化する、運命の前に置かれたのである、彼れ兇暴なる米飛行機は、大阪市の燒夷に成功せんか、勝ちに誇つて、隨所に大爆撃を加へ、數日を待たで、帝國樞要の都市要所は、盡く爆破燒夷され、國民は